

筑後国府跡・国分寺跡

昭和56年度発掘調査概報

久留米市文化財調査報告書

第 33 集

1 9 8 2

久留米市教育委員会

筑後国府跡・国分寺跡

昭和56年度発掘調査概報

序

この報告書は、久留米市教育委員会が国・県費の補助を受けて、昭和56年度に実施した久留米市合川町所在筑後国府跡、並びに同国分町所在筑後国分寺跡の発掘調査の概要であります。それぞれ広大な面積を占める遺跡ではありますが、今年度の調査でも、国府跡においては字葉山地区で新たな官衙遺構の発見があり、また字柿ノ内で推定国衙跡内郭築地の東北隅が確認され、国府域内の官衙のあり方について重要な知見が得られたのをはじめ、国分寺跡においては僧寺の南限を画する溝状遺構が検出されるなど、注目すべき成果があがっております。

特に今年度、筑後国分僧寺の一部（講堂、塔及び回廊跡）について、久留米市文化財保護条例による史跡指定が実現いたしましたことは、久留米市の文化財保護に一步を進めたものとして誠に意義深いものがあります。改めて関係各位のお力添えを感謝いたしたいと思ひます。

国府、国分寺跡の発掘調査によって得られた資料は膨大な量に達し、目下整理途上にありますため、今回もその概要の紹介にとどめざるを得ませんでした。記録として決して満足できるものではありませんが、本書が文化財の啓蒙、普及のための一助となり、あわせて郷土の歴史の解明に資するところがあれば幸甚に存じます。なお、調査に際してご理解、ご協力賜りました各地権者はじめ関係各位に対し、衷心より御礼を申し上げて序といたします。

昭和57年3月31日

久留米市教育委員会

教育長 宮崎 秀義

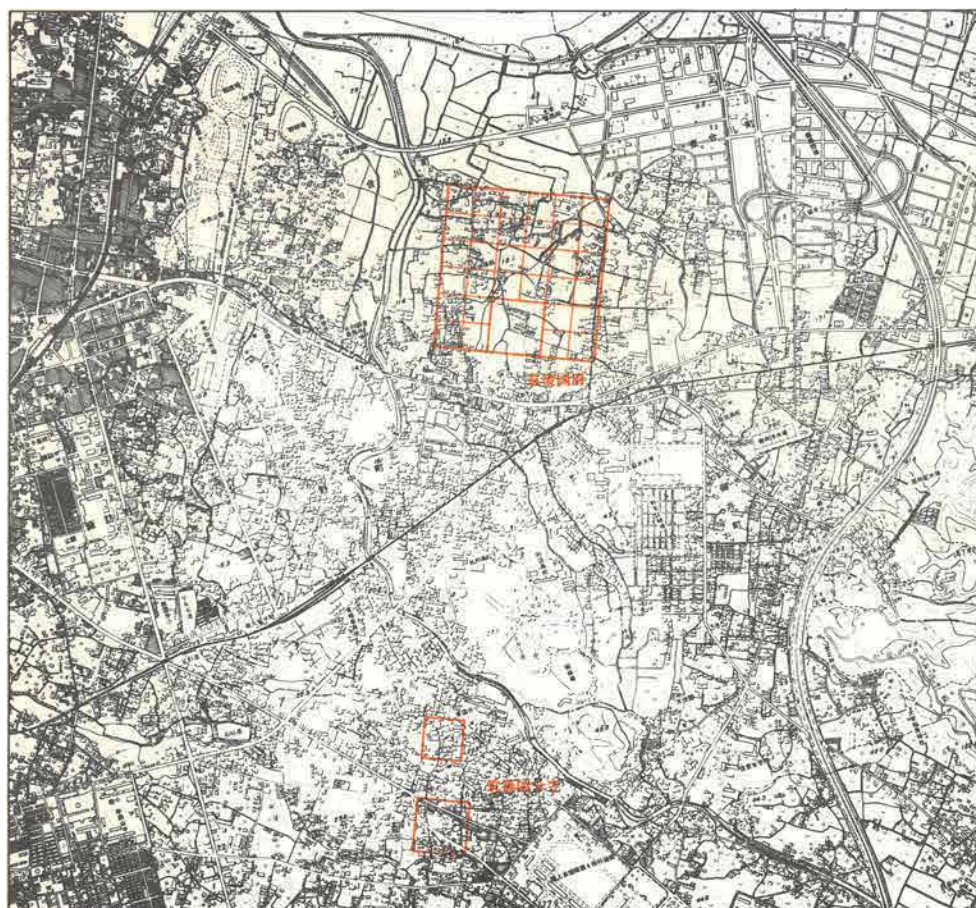
例 言

1. 本書は、昭和56年度に久留米市教育委員会が実施した、筑後国府跡、筑後国分寺跡の発掘調査概要の報告書を集録したものである。
2. 本書に集録した報告は、下記の目次に記したとおりである。
3. 本書の執筆者は各例言に記し、その文責を明らかにし、全体の編集は櫻井康治が行なった。

目 次

筑後国府跡.....	1
------------	---

筑後国分寺跡（Ⅳ）.....	25
----------------	----



筑後国府跡・国分寺跡位置図

筑後国府跡

昭和56年度発掘調査概報

卷首図版



透彫花蝶文香炉（緑釉陶器）

第31次調査出土

例 言

1. 本書は、久留米市教育委員会が国、県の補助を受けて、昭和56年度に実施した、市内合川町所在の、筑後国府跡の発掘調査概要の報告である。なお第47次調査は受益者負担による発掘調査であるが、国府域内に位置するため、本書にその報告を集録した。また第50次調査は現在調査中であるので、今回はその概略の報告にとどめ、詳細は次回にゆずる。
2. 発掘調査は、文化部文化財担当調査係の松村一良、櫻井康治が担当した。なお、第47次調査については同古賀壽が担当した。
3. 掲載の実測図の作成、製図と写真撮影は調査担当者と吉富力が行なった。なお、報告書作成にあたっては、文化財担当調査係の萩原裕房、大石昇、立石雅文の協力を得た。
4. 調査にあたっては、下記の各位より御指示、協力を得た。記して謝意を表したい。

筑後国府跡発掘調査指導委員会

横山浩一	九州大学教授
西谷 正	九州大学助教授
山本輝雄	九州大学助手
沢村 仁	九州芸術工科大学教授
佐田 茂	福岡教育大学講師
小田富士雄	北九州歴史博物館主幹
渡辺正気	前九州歴史資料館参事
石松好雄	九州歴史資料館調査課長
轟久嗣郎	県立福島高校教諭
栗原和彦	福岡県文化課調査第二係長
相川清光	合川公民館長

国立歴史民俗博物館助教授

阿部義平	前文化庁記念物課調査官
------	-------------

5. 本書の執筆分担は次のとおりである。

I・IV・VI	松村
II	古賀
III	吉富
V	櫻井

6. 本書に示す方位「N」はすべて真北方位を指すものであり、遺構表示については下記の略記号に拠る。

SA……築地、塀、柵 SB……建物 SD……溝

SE……井戸 SK……土壇 SX……その他

7. 本書の編集は松村、櫻井が担当した。

目 次

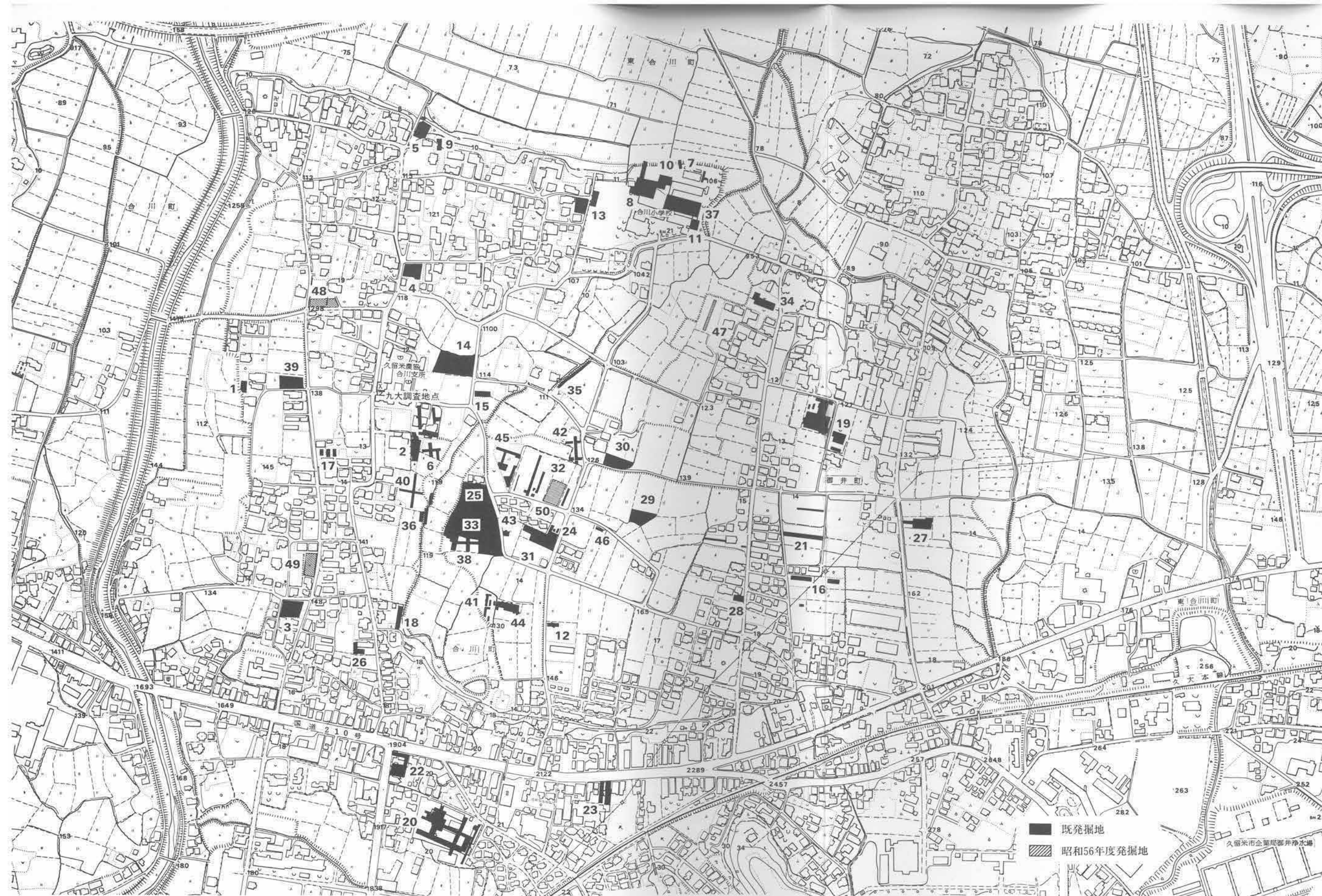
I 調 査 経 過	1
II 第 47 次 調 査	2
III 第 48 次 調 査	4
IV 第 49 次 調 査	7
V 第 50 次 調 査	15
VI ま と め	22

挿 図 目 次

第1図	筑後国府跡発掘調査地域図	折込み
第2図	第47次調査遺構配置図	3
第3図	第48次調査遺構配置図	5
第4図	遺構関係模式図	6
第5図	第48次調査出土遺物実測図	7
第6図	第49次調査遺構配置図	折込み
第7図	第49次調査出土遺物実測図	11
第8図	主要遺構変遷図	13
第9図	第49次調査周辺図	14
第10図	第50次調査遺構配置図	折込み
第11図	S X2395実測図	17
第12図	整地土層範囲図	18
第13図	S X2395出土遺物実測図	20
第14図	S K2402土壇出土遺物実測図	21
第15図	S K2429土壇出土遺物実測図	21
第16図	第50次調査出土主要遺物一覧	23
第17図	国衙域出土主要遺物一覧	折込み

表 目 次

第1表	昭和56年度発掘調査一覧表	1
-----	---------------	---



第1図 筑後国府跡発掘調査地域図

I. 調査経過

昭和56年度の調査は当初、推定国衙域の内郭東北部の調査を実施する計画であったが、調査対象地の稲作との関係で、秋の稲刈り後に実施することにして、先に申請が出されていた合川町所在の2地点について、第48次・第49次調査を実施した。

第48次調査は字大林地区において5月下旬から6月上旬にかけて行なったものである。調査は推定国府域(方六町)の西限付近に位置し、南方約100mの第39次調査で検出した国府域の西限を画すると考えられる溝(S D1801)の延長部の有無を確認することを目的として実施した。

第49次調査は7月上旬から9月上旬にかけて字葉山地区で行なったものである。この調査は先に実施した第3次調査において、建物群等を囲繞する施設と考えられる溝が検出されていたため、この溝によって囲まれた内側の遺構の有無を確認することを目的として行なった。調査の結果、官衙的色彩の強い掘立柱建物群が検出され、国府域内における官衙のあり方に新たな問題が提起されるに至った。

次に11月下旬に入って、第50次調査として、当初、計画していた推定国衙域の内郭東北部の、柿ノ内地区の調査を実施した。第50次調査地は築地によって画される内郭の東北隅付近にあたり、内郭の四隅についての知見を早急に得る必要性から調査を実施したものである。この調査は3月上旬現在調査中である。

なお、このほか第47次調査として、字吉原地区の分譲住宅建設に伴う受益者負担による事前調査を実施した。

調査次数	調 査 地	調査面積	調 査 期 間	調査担当者
47	合川町字吉原434	120m ²	1981. 5. 8～1981. 5. 22	古賀
48	合川町字大林1186-1	88m ²	1981. 5. 22～1981. 6. 2	櫻井, 松村
49	合川町字葉山1220-1	286m ²	1981. 7. 20～1981. 9. 9	櫻井, 松村
50	合川町字柿ノ内375-1, 376-1	880m ²	1981. 11. 19～1981. 3. 30 (予定)	櫻井, 松村

第1表 昭和56年度発掘調査一覧表

II. 第47次調査

本調査は、住宅建設に伴う事前の調査である。南北に長い調査対象地の長軸にそって、幅3 m、長さ37 mのトレンチを設定した。発掘調査は1981年5月8日に開始し、同年5月22日に終了した。地番は久留米市合川町字吉原434番地の1である。

検出遺構

層序はトレンチ北部の断面によれば、地表より①埋立土（厚さ約20cm）、②灰褐色耕土（厚さ約10cm）、③暗褐色土（厚さ約15～20cm）、④暗灰褐色土（厚さ約15cm）、⑤黄褐色地山の順となる。検出遺構は土壇3、溝状遺構3、掘立柱建物1、ピット多数などで、④の暗褐色土上面から掘り込まれているが、不明瞭のため⑤の地山面で確認した。

土壇

S K2041は浅い皿状の土壇である。S K2042も同様な浅い土壇であるが、土師器碗1個がほぼ完形で出土した。S K2043は前2者に比べて大きく、壁は垂直に近く深さも深いが、出土遺物は皆無であった。

溝

トレンチ南部に見い出された。S D2044・2045は浅く狭いが溝状を呈し、南北に並行している。S D2046は溝となるかどうか判らないが、前2者の南に並行する。いずれもトレンチ内で終わっている。

掘立柱建物

トレンチ北端の柱穴6個により想定される建物を、S B2047とする。柱穴の並びはかなり不揃いであるが、柱間距離は東～西、南～北とも約150cm（5尺）を測る。総柱の倉庫建物と考えられる。東半分はトレンチ外となる。

ピット群

ピットは全体に小さく、中には柱穴と思われるものもあるが、S B2047以外にまとまるものはない。

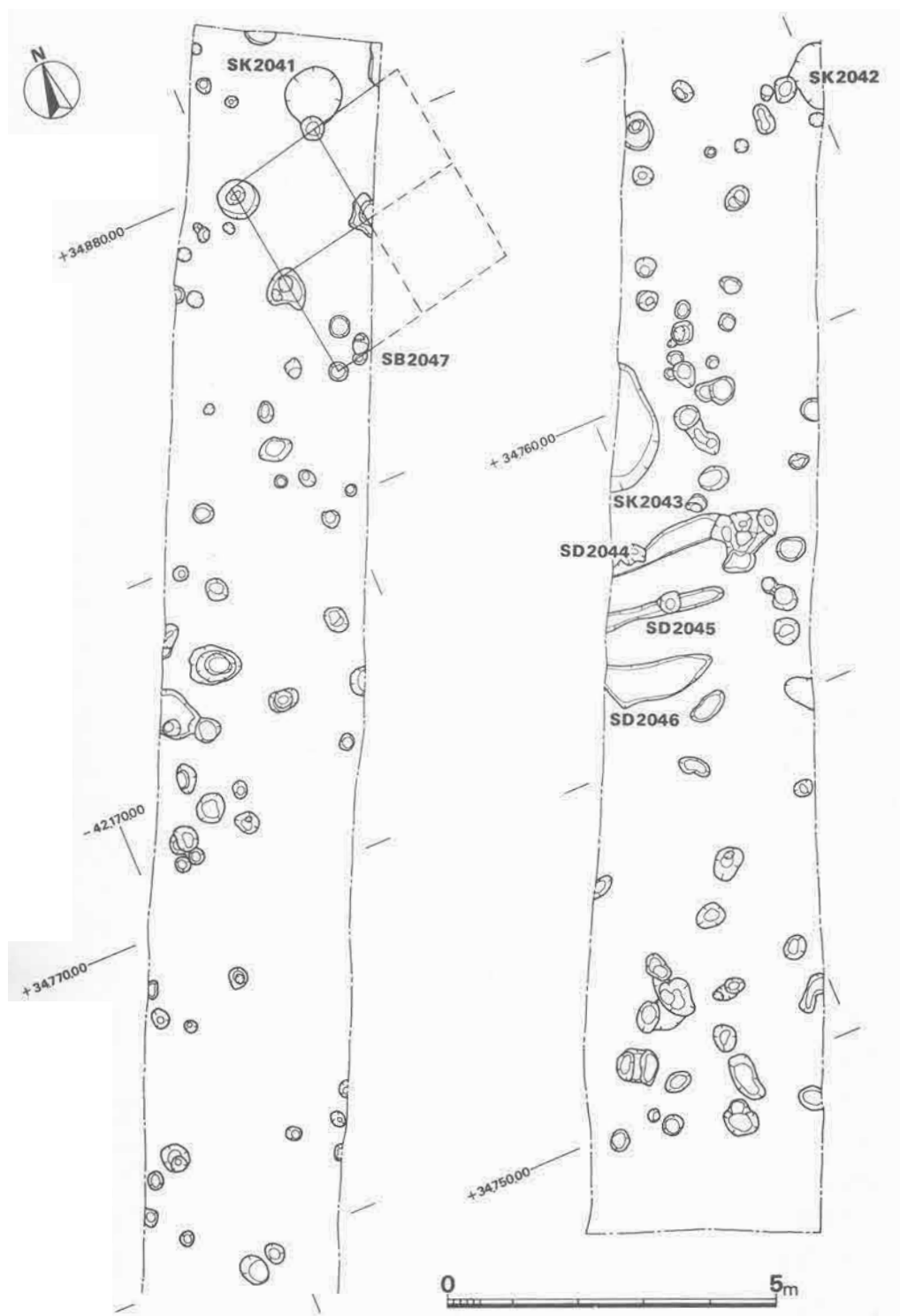
出土遺物

出土遺物は細片が多く、量的にも少ない。すべて歴史時代のものである。奈良時代の遺物として土師器、須恵器があり、平安時代に属するものに土師器（黒色土器を含む）、斜格子の叩きを持つ布目瓦などがある。

小 結

本地点は狭長な低地に面した低位段丘の縁辺で、推定国府域の東北隅に近く位置するが、発掘調査の結果、国府に直接関連するような遺構は検出されなかった。トレンチ北端の倉庫建物の存在は注目されようが、これとても単独で、倉庫群の一部を構成するものとは認め難い。

遺構の多くは、埋土中に含まれる遺物から見て、平安時代中期に属するものと思われる。



第2図 第47次調査遺構配置図 (1/100)

Ⅲ．第48次調査

本調査は、個人専用住宅建築に併なう事前調査である。調査対象地は、国府域推定条坊案（方六町）の西限を画すると考えられる S D1801（第39次調査において検出）の北方延長線上に位置する。そこで、調査対象地に 3 m×24 m の東西トレンチを設定し、調査を実施した。調査は 1981 年 5 月 22 日に開始し、同年 6 月 2 日に終了した。地番は久留米市合川町字大林1186-1番地である。

検出遺構

表土を約 20 cm 下げると、すぐに黄褐色粘質土の地山面に達した。遺構はすべてこの面で検出され、堅穴住居跡 2、溝状遺構 4、土壇 1、ピット多数とともに、トレンチの東端部で字界と思われる旧道路敷が確認された。

堅穴住居跡

S B2100 トレンチの西端部で検出された隅丸方形の堅穴住居跡である。遺構の全容は、大部分が調査区外にあるため、確認できなかった。床面は平坦にして、堅緻であり、壁面は高さ約 30 cm ほど残存していた。弥生土器片、土師器甗、把手、須恵器片、石斧、刀子が出土した。S K2104 と切り合っているが、検出段階では先後関係は明らかにできなかった。しかし、出土遺物から住居跡が古く考えられる。

S B2101 トレンチの中央西寄りに位置する堅穴住居跡である。遺構の北部分が未検出であるが、短辺約 3.7 m×長辺約 4 m と推定される隅丸長方形の住居跡である。床面は、遺構の中央部を S D2103 a、S D2103 b によって切り込まれているが、おおむね東から西へ緩かに傾斜している。壁面は高さ 4 cm～15 cm を測り、あまり良い残存状態とはいえない。床面から弥生土器片、土師器甗、把手が出土した。

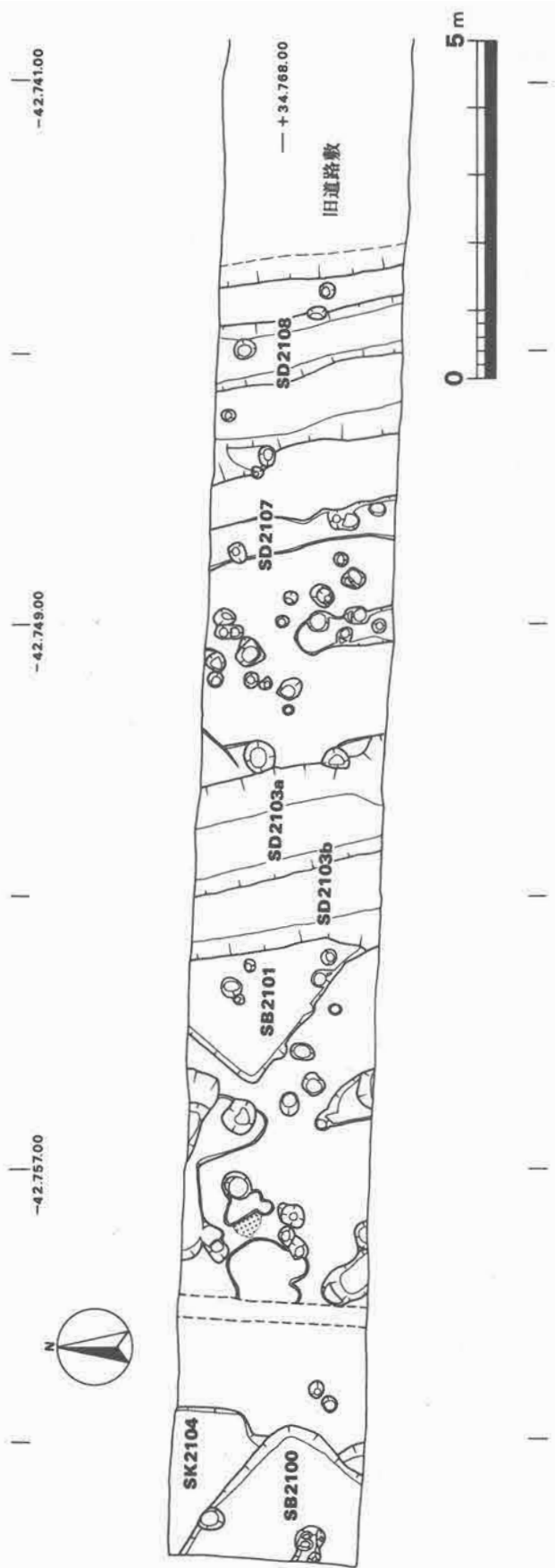
溝

S D2103 a トレンチ中央西寄りで S B2101 を切り込んだ状態で検出された溝状遺構である。幅約 1.6 m、深さ 90 cm 前後を測り、溝底は北へいくにつれて深くなる。瓦器埴、斜格子平瓦、丸瓦が出土した。

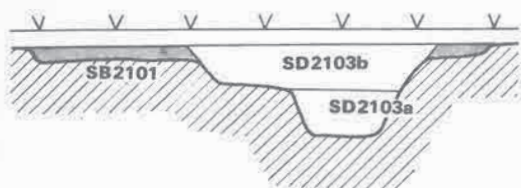
S D2103 b 幅約 2.6 m、深さ 50 cm 前後の溝状遺構である。溝底は、S D2103 a と同様、北方へ深くなる。この溝状遺構は、S D2103 a と方向柱や、東壁がほぼ一致することから、S D2103 a の溝幅を拡張した可能性も考えられる。土師器片、青磁、白磁が出土した。

S D2107 トレンチ中央東寄りに位置する溝状遺構で、幅 40 cm～60 cm を測り、深さは 10 cm 未満の浅いものである。遺物の出土は見られなかった。

S D2108 S D2107 の東約 2 m の位置で検出された溝状遺構である。幅 0.8 m～1.0 m、深さ 14 cm～35 cm を測り、溝底は南の方へ深くなる。出土遺物は見られなかった。



第3図 第48次調査遺構配置図 (1/100)



第4図 遺構関係模式図

土 壇

S K2104 トレンチの西端部で検出された土壇で、規模は明らかでない。S B2100と切り合い関係にあるが、先述したようにS B2100より新しいと考えられる。土師器小皿・内黒土器片が出土した。

出土遺物

弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、磁器、瓦、石製品、鉄製品が出土した。しかし、出土遺物は細片が多いうえに摩滅が著しいので、図示し得る遺物は少ない。

1はS B2100とS B2101床面から出土した土師器甑で、破片の大部分はS B2101床面から出土した。口径、器高とも明らかでない。体部は、ほぼ直線的に立ちあがり、口縁部でわずかに外反する。全体に摩滅が著しいが、口縁部は横ナデ調整、その他は縦方向のハケ目調整が施してある。口縁端部下約2cmの位置に約3cmの間隔で一对、さらにそれより約10cmほど離れて、口縁部下約6cmに1個、また同一の土器片と考えられる破片の口縁端部下約2cm位置に一对と思われるうちの1個、合わせて4個の穿孔を有する。これらの穿孔のうち体部にある穿孔は、いかなる目的で穿れたのか不明である。2はS B2101床面から出土した把手で、1の甑に付随するものであろう。3の把手はS B2100から出土した。4はS K2104から出土した土師器小皿で、口径は明らかでないが、器高2.7cmを測る。ヘラによる切り離して、摩滅が著しく、調整は判別し難い。

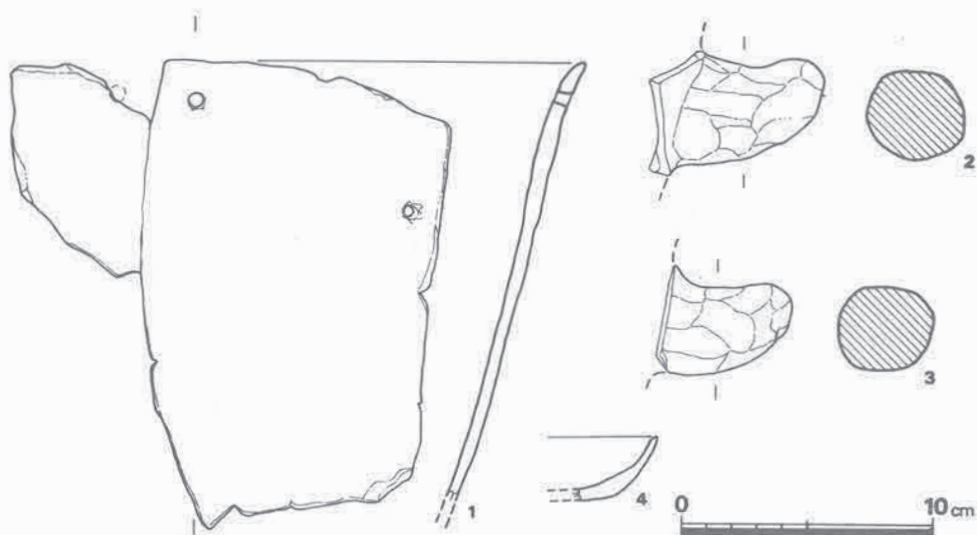
小 結

調査の結果、調査対象地では国府域推定条坊案（方六町）の西限を画する溝状遺構は認められなかった。調査対象地より若干西寄りに位置すると考えられる。

S D2103 a・S D2103 bは、時期的な差はあまり考えられず、先述したようにS D2103 bはS D2103 aの拡幅によることも考えられる。時期は出土遺物から平安時代後期を遡ることはない。

S K2104は、出土遺物が少ないが、図示した土師器小皿から10世紀代に比定できよう。

堅穴住居跡は、S B2101床面出土の甑から古墳時代後期の住居跡と考えられる。そうすると、新たに検出された堅穴住居跡は、25・33・38次調査において検出された古墳時代終末の堅穴住居跡群に先行する時期に位置づけられるとともに、筑後国府成立以前における集落跡の解明に貴重な一資料となるであろう。



第5図 第48次調査出土遺物実測図 (1/3)

Ⅳ．第49次調査

この調査は住宅建設に伴う事前の調査である。調査地は枝光台地の西辺部に位置し、標高約14mを測る。西方約250mには高良川が北流している。調査地の現状は畑地で、緩やかに西方へ傾斜する。1973年、調査地の南方約50mの地点において第3次調査が実施され、奈良へ平安時代の掘立柱建物、溝、土壇などが検出されている。

調査は対象地の東半部に野菜が作られていたため、まず、西半部から実施することにし、土層の確認を行なったのち、機械力による耕作土、床土の除去を行なった。東半部は野菜の収穫期との関係で、全面発掘が困難であるため、収穫の済んだ箇所順に順次、サブトレンチを設定し、調査を実施した。調査は1981年7月20日から開始し、同年9月9日に終了した。地番は久留米市合川町字葉山1220-1番地である。

検出遺構

今回の調査で検出された主な遺構は掘立柱建物、柵、土壇、溝などである。土層の堆積状況は上から順に耕作土、床土、褐色土で、その下は黄褐色粘質土（地山）である。遺構は溝S D 2210が褐色土層から掘込まれている他はすべて黄褐色粘質土（地山）上面で検出したものである。また、これらの遺構は重複関係にあるものが多く、数期の変遷が考えられる。

掘立柱建物

S B 2243 東西2間（5.0m）以上×南北3間（5.7m）の規模をもつ建物で、東西棟と推定

される。柱穴は方1.0～1.3m、深さ0.6～0.8mである。柱穴内は黄色粘質土と黒褐色土とによる丁寧な版築が施されている。柱痕跡から径30cm前後の柱が想定される。S B2245の柱穴を切込んで作られており、S K2215、S D2211より先行する。S B2301と棟方向が一致する。

S B2244 東西2間(4.4m)×南北2間(5.2m)の建物で、総柱建物の可能性も考えられる。S B2254と重複関係にあり先行する。柱穴は東側柱列の中央柱穴が一辺75cmの方形を呈するほかすべて径0.5～0.6mの円形である。東側柱列南端の柱掘形から瓦器碗片が出土している。

S B2245 東西3間(5.1m)以上の規模をもつ建物で、東西棟建物である。梁行柱間はS D2211、S K2215に切られているために不明であるが、梁行全長は4.4mを測る。柱穴は0.6×0.8m前後の長方形を呈し、その埋土は黄色粘質土と黒褐色土による粗い版築が施されている。S B2262・2299と建物の方向性が一致する。

S B2254 東西2間(5.3m)×南北3間(7.3m)の南北棟建物である。柱穴は径0.3～0.6mの円形を呈する。S B2244と重複関係にあり、新しい。

S B2260 東西2間(4.5m)以上×南北3間(5.8m)の規模を有する建物で、東西棟と推定される。柱穴は方0.9～1.3mの隅丸方形を呈し、深さ0.5～0.7mを測る。柱穴内は黄色粘質土と黒褐色土、褐色砂質土による丁寧な版築が施されている。柱痕跡から径25～35cmの柱が想定される。北方に位置するS B2292の棟方向と一致する。

S B2262 東西2間(3.5m)以上×南北2間(3.55m)の規模をもつ建物で、さらに西方へ延びている。東から2番目の柱筋に間仕切りの柱穴を設けている。また、北1.7mには柱筋を揃えた柵を設けており、目隠し用と考えられる。S B2245・2299と建物の方向性が一致する。

S B2292 S B2262と重複する東西2間(3.3m)以上×南北3間(3.8m)の規模をもつ東西棟建物である。柱穴は0.5～0.7m、深さ0.4m前後を測る。

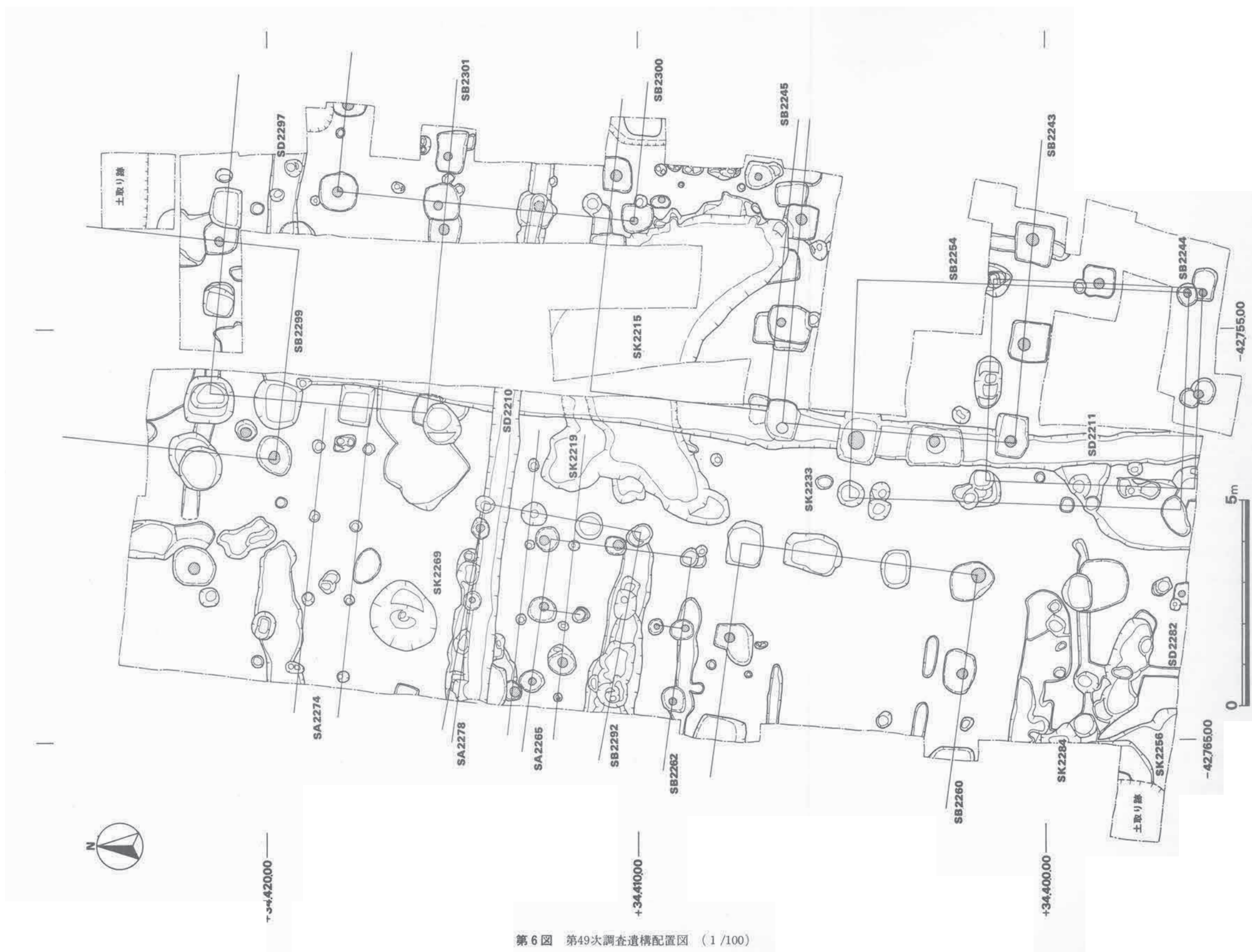
S B2299 建物の大部分が未調査区にかかるため、規模等は不明であるが、東西全長は5.2mを測る。S B2301と重複関係にあり、先行する。S B2245・2262と建物の方向性が一致する。

S B2300 東西1間(2.2m)以上×南北3間(7.3m)の規模を有する建物で、さらに東方の市道下に延びている。柱穴は方0.9m前後で、隅丸方形を呈し、深さはいずれも60cm前後を測る。柱痕跡から径25cm前後の柱が想定される。

S B2301 東西3間(6.2m)以上×3間(5.3m)の規模を有する建物である。柱穴は方0.8～1.2m、深さ0.6m前後を測る。S B2299より新しく、S B2300、S D2297より先行する。S B2243と棟方向が一致する。

柵

S A2265 東西に延びる二重の柵列で、3間(5.5m)分検出したが、さらに西方の未調査区に延びようである。柱間は1.83m、南北両柵列間の距離は1.1mを測る。柱穴は径25cm前後



第6図 第49次調査遺構配置図 (1/100)

で、深さは30～45m、やや北側柵列のほうが深く掘られている。柱穴から糸切り底の土師器刃片が出土した。

S A 2274 S A 2265の北方を東西に延びる二重の柵列で、3間(5.5m)分検出した。S A 2265と平行し、南北両二重柵列の柱筋は一致する。柱穴の規模は、S A 2265と同様であるが、深さは特に南北いずれの側の柵列が深いという特徴は認められない。柱穴より糸切り底の土師器皿が出土している。

溝

S D 2210 東西に延びる溝で、長さ約13m分を検出した。溝の幅は55～70cm、深さは15～30cmで、断面はU字形を呈する。溝底は平坦で、西方へ緩やかに傾斜する。溝内には灰褐色土が堆積し、少量の土師器などが出土した。

S D 2211・2297 S D 2211は調査区の中央を南北に延びる溝で、南はさらに調査区外へ延びているが、北端は東西に延びる溝S D 2297の西端に続くものと考えられる。幅は0.8～1.0m、深さ25cm～30cmを測る。埋土は上、下2層からなり、人為的埋土とみられる黄褐色粘質土混り黒褐色土層の上に茶褐色土層が形成されている。上・下いずれの層からも少量の土師器、須恵器、瓦類、轆羽口、鉄滓などが出土している。

S D 2282 調査区の北西隅付近で検出した南北に延びる小溝で、土師器が出土。

土 壇

S K 2215 調査区の中央で検出した土壇で、4.0×7.5mの弧状を呈する。S D 2211に先行して掘られており、S B 2243より新しい。北西部にS K 2219が重複しているが、遺構の新旧関係は確認できなかった。調査期間の都合で、完掘できなかったが、一部を掘下げた結果は、深さ約1mを有する。埋土は黄色粘質土を混えた黒褐色土が堆積していた。埋土中より土師器(杯、杯蓋、盤、甕、高杯、鉢)、須恵器(杯、杯蓋、高杯、甕)、内黒土器、瓦類(平、丸瓦)、轆羽口、鉄滓などが出土した。土師器、須恵器はいずれも細片が多く、全形を知るものは少ない。内黒土器は遺構検出面で出土したもので2/3を欠損する。混入の可能性が強い。

S K 2219 S K 2215に重複する土壇で、不整形を呈すると考えられる。深さは40～50cmで、ほぼ平坦をなす。少量の土師器、須恵器などが出土した。

S K 2256 調査区の西南隅で検出した土壇で、西辺は土取りのため削り取られている。土師器、須恵器、轆羽口、鉄滓などを出土した。

S K 2269 径1.7m前後の円形を呈する土壇で、深さ0.75mを測る。茶褐色土が堆積しており、少量の土師器、須恵器が出土した。

S K 2233 径80cmの土壇で、深さ20cmを測る。土師器盤が出土した。

S K 2284 調査区の南西隅付近で検出した土壇で、未調査区に延びている。須恵器杯蓋が出土した。

出土遺物

発掘調査の結果、少量ではあるが、土師器、須恵器、瓦類、韃羽口、鉄滓などの遺物が出土した。このうち主体を占めるのは土師器であるが、細片が多く、実測可能なものは非常に少ない。また、検出された遺構の中心を占める掘立柱建物はその掘形内に遺物を包含することが少なく、ほとんどが土壇、溝からの出土である。以下、主な遺構の出土遺物について概略を述べる。

SK2215出土土器（第7図1～14）

須恵器 1～4は杯蓋で、返りを有するもの（1・2）と口縁部端が下につまみ出されたもの（3・4）とがある。いずれも焼成は良好で、色調は青灰色を呈する。5は杯身でへう切り底である。6は高台付杯で底部の端に高台を張付けている。10・11は盤である。いずれも外反気味の口縁部をもつ。

土師器 7は高台付碗で、口径14.1cm、器高5.5cmを測る。体部はやや内彎気味に立上がり、底部の端に低い高台を有する。体部外面下方にはへう削りを施す。底部にはへう切り痕を残す。色調は淡赤褐色を有し、焼成は良好である。8・9は盤である。いずれも平らな底部を有するが、底部と口縁部との境が明瞭なもの（8）と底部から口縁部へなめらかに移行するもの（9）とがある。8は口径18.4cm、器高2.9cmを測る。12は壺の底部で、器面の荒れが著しい。短く力強く踏ん張った高台を有する。14は高杯で、杯部口径22.1cm、器高16.2cm、胸部径13.7cmを測る。口縁部及び脚端部はつまみ出されている。色調は淡赤色を呈し、胎土、焼成は良い。

内黒土器 13は高台付碗で、1/3が遺存する。口径17.9cm、高台径10.4cm、器高8.4cmを測る。脚部は大きく開き、広く平坦な底面に直線的に延びる体部がつく。器面の荒れが著しい。

SK2219出土土器（第7図15～17）

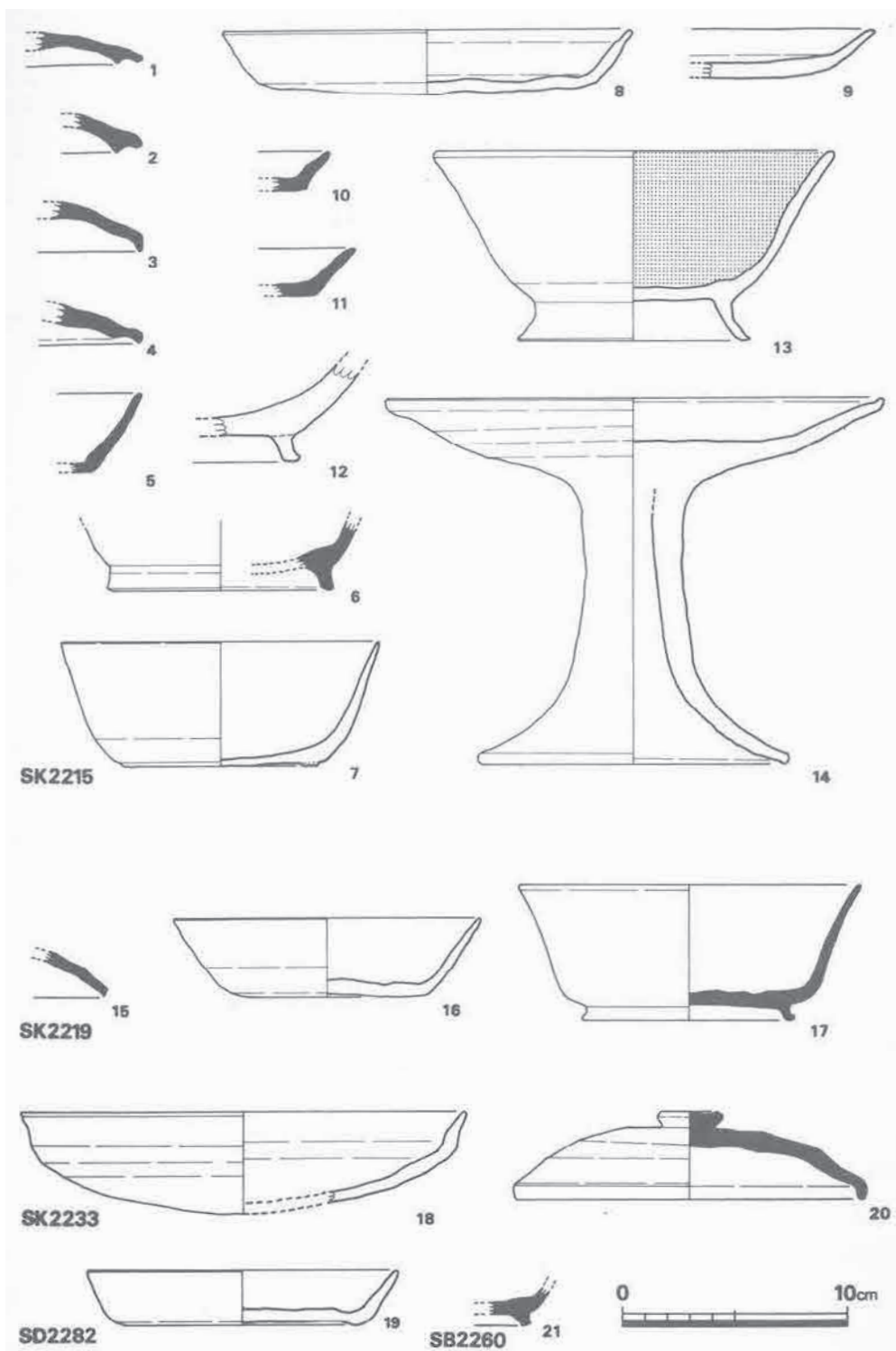
須恵器 15は杯蓋で、口縁端部は嘴状を呈する。色調は青灰色、焼成は良好である。17は杯で低い高台がつく。体部は大きく外反気味に立上がる。口径15.2cm、器高6.0cmを測る。底部内面、および体部内外面をよこなで調整し、底部外面はへう切り痕を残す。青灰色、硬質である。

SK2233出土土器（第7図18）

土師器 18は丹塗りの盤で、丸底気味の底部に短く外反する口縁部がつく。底部外面は手持ちのへう削りで、底部外面および口縁外面にはへう磨きが施されている。口径19.9cm、器高4.5cm、胎土、焼成ともに良好。

SK2284出土土器（第7図20）

須恵器 20は杯蓋で、擬宝珠状のつまみを有する。天井部外面はへう削りを施し、口縁端部は下方につまみ出されている。蓋の内外面に油煙が付着しており、灯明皿として使用されたものである。口径15.7cm、器高3.9cmを測る。胎土には粗い砂粒を含むが、焼成は良好で、青灰色



第7図 第49次調査出土遺物実測図 (1/3)

を呈する。

S D 2282出土土器 (第7 図19)

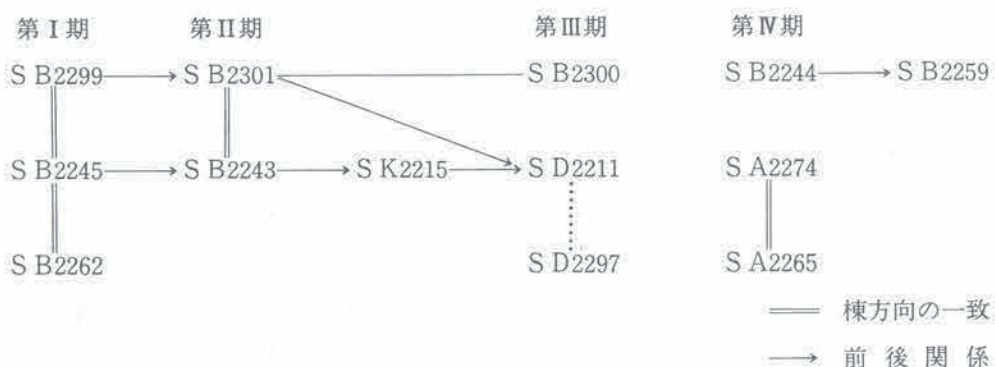
土師器 19は皿で、底部外面は上げ底気味で、へら切り離しである。口径14.0cm、器高2.5cm。胎土、焼成ともに良好で、淡赤褐色を呈する。

S B 2260掘形出土土器 (第7 図21)

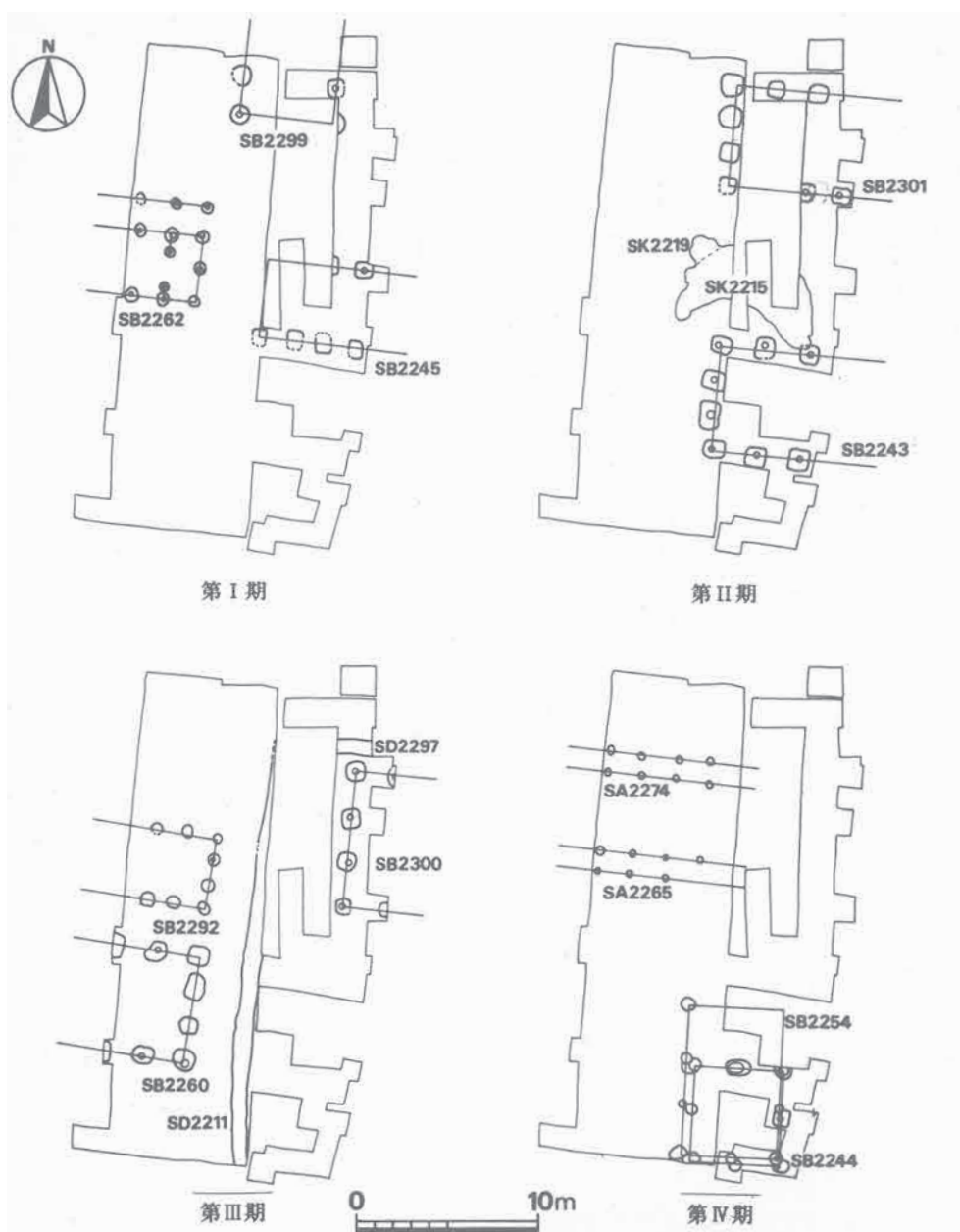
須恵器 21は杯で、底部端部に低い張付け高台を有する。

小 結

本調査は狭い面積の調査ではあったが、掘立柱建物10棟をはじめ、柵、溝、土壇など多数の遺構が検出された。これらの遺構はほとんど下層の黄褐色粘質土（地山）上面で検出されたもので、層位による時期の決定は困難であるが、遺構の重複関係によって4 期に分期することができる。重複する遺構の相関関係は次のとおりである。



掘立柱建物はその柱掘形埋土からほとんど遺物が出土していないため、時期の決定が困難である。S K 2215土壇の出土土器は内黒土器の高台付椀（第7 図13）1 点が平安時代に下るほかは奈良時代後半のものが主体を占めることから、この内黒土器は出土状況などから類推して後に混入したものと考えられる。従って、このS K 2215土壇の廃絶を奈良時代後半に位置づけ、第Ⅱ期の下限は8 世紀後半頃に次められる。第Ⅲ期については遺構配置や重複関係からS B 2300と同時期に存在したと考えられるS D 2211・2297の両溝の出土土器により、その下限は9 世紀中頃に比定される。第Ⅰ期は他の遺構出土の土器に奈良時代前半から同中頃のものが認められることからほぼ8 世紀前半頃に位置づけられる。第Ⅰ期は他の遺構から出土した奈良時代前半頃の土器がこの期に該当すると考えられ、その上限は8 世紀前半代に溯ることが考えられる。第Ⅳ期はS B 2244の柱掘形埋土から瓦器椀の細片が出土しており、当地方で瓦器の出現は11世紀初めと考えられることからその上限は11世紀初めを遡らない。S A 2274・2265はいずれも柱掘形埋土から糸切り底の土師器小皿細片が出土しているので、同じく当地方での糸切り底の出現する12世紀初めを遡ら



第8図 第49次調査主要遺構変遷図 (1/200)

ない。このように第Ⅳ期に比定した建物と二重柵列は出土遺物が小片のため、大まかな年代しか想定できないが、一応両者は同時期と考え平安時代後期の12世紀代に比定しておきたい。

また、S B2260は柱掘形埋土から奈良時代後半期の須恵器が出土していること、柱掘形埋土の状況がS B2300のそれと類似することなどから第Ⅲ期に属するものと考えられる。S B2262・



第9図 第49次調査周辺図 (1/1000)

2292の両建物は時期を決定できない。

出土土器が小片のため時期の決定が困難であるが、建物の棟方向から考慮すると、前者は第Ⅰ期に、後者は第Ⅲ期に各々比定できよう。

以上のように検出した遺構は、奈良時代中頃から平安時代後期に至る長期間にわたって営まれたものであるが、途中、平安中期の遺構が欠落している。検出された遺構はこの欠落期を境にその性格が大きく異なるようである。すなわち第Ⅰ期～第Ⅲ期は建物の方向に計画性が認められ、大形の方形掘形をもつ建物で構成され、梁間も3間にとるものが多い。第Ⅳ期になると建物規模も小さくなる。

第Ⅰ～Ⅲ期にみられるような大形の建物群は筑後国府域では字「風祭」地区の国衙推定地で検出されたのみで、しかも風祭地区では梁間を3間とする大形の方形掘形をもつ建物は、主要建物に認められるだけである。

このように本調査地の第Ⅰ～Ⅲ期の建物は風祭国衙推定地のそれに共通性が認められ、時期的にもほぼ一致する。今回の調査では瓦類の出土はみたものの、特に官衙的性格を示す遺物は検出されていないが、以前、付近で陶硯1点が採集されていることを考慮すると、本調査地の第Ⅰ～Ⅲ期の遺構は、国衙とほぼ同時期に営まれた官衙の1つである可能性が強い。なお、第3次調査で検出した溝SD1は出土遺物から本調査地の第Ⅰ～Ⅲ期に相当し、この官衙の西南を画する溝と考えられる。この官衙の性格については不明であるが、この地の小字名が「葉山（はやま）」と称することから駅馬（はゆま）の転訛したものとしてこの地に駅館の存在を推定する説があることを掲げておきたい。

V. 第50次調査

本調査は、第24・31次調査において検出した東面築地と、第32・45次調査において検出した北面築地の延長線上にあたり、これらの築地の状況を確認することを目的として実施したものである。発掘調査は、1981年11月19日から開始し、3月上旬現在拡張区を調査中である。よって掲載した図面等は2月10日までの成果である。地番は、久留米市合川町字柿ノ内375-1, 376-1番地である。

検出遺構

調査の結果、掘立柱建物1、柵1、溝4、土壇多数が確認された。当初の推定通り、築地の基底部が確認され、郭の北東角が検出された。築地基底部と、内郭部分は、すでに削平されており耕作土下直ちに地山に達し、包含層も認められなかった。しかし築地の周辺部分は包含層が残っており多量の遺物を出土する。

掘立柱建物

S B 2436 2間(4 m)×2間以上の規模を持つ東西棟の建物と思われる。柱間は梁行が1.8 mと2.2 mを測り、桁行が1.9 mを測る。柱穴は径40 cm前後のものが掘られているが、柱痕跡は確認できなかった。重複関係から S X 2352 より古い。

溝

S A 2437 南北に5間(8.3 m)分が検出されたが、削平を受けているため、さらに延長される可能性もある。築地とはほぼ並行関係にあり、また S B 2436 と同方向性が一致する。

築地

S A 2451・2452 築地は基底部から削平を受け、規模などは不明であるが溝状遺構によってつくられた空間よりその位置を窺うことができる。遺構は、東面築地(S A 2451)約27 m、北面築地(S A 2452)約9 mを測る。内郭の北東隅にあたる部分である。築地の両側に掘り込まれた溝状遺構は、両方ともいわゆる溝ではなく、土壇の連続で溝状を呈するものである。故に底面のレベルも一定でなく、本来雨落溝としての性格を持つべきものであるはずだが、これでは排水に不都合であると思われる。しかし反面、S D 2377はS D 2390と接する箇所において、さらに北へ溝は延びていることは排水を意識したものであろうか。両側の溝状遺構は、一気に埋った痕跡があり、埋土中に築地本体の版築塊が確認された。S D 2377西側に沿って、新たに土壇が掘り込まれている。これらの土壇は、切り合い関係にあるものもあり、幾度となく掘られたものであろう。

溝

S D 2397 南北に延びる断面U字形の溝で、幅約1 mを測り、長さ約9 mを検出した。底面は北へ緩やかに深くなる。遺構は築地部分からさらに S K 2400 を切っており、築地と直接に関わりは考えられない。故に、この遺構が設けられる以前に築地は消滅していたものと思われる。

S D 2404 調査区東北部で北と東へ延びる断面U字形の溝である。幅は最大約1 m深さ約0.4 mを測り全長17 mを検出した。S K 2402・2409より新しく、整地土層を切り込んでいる。

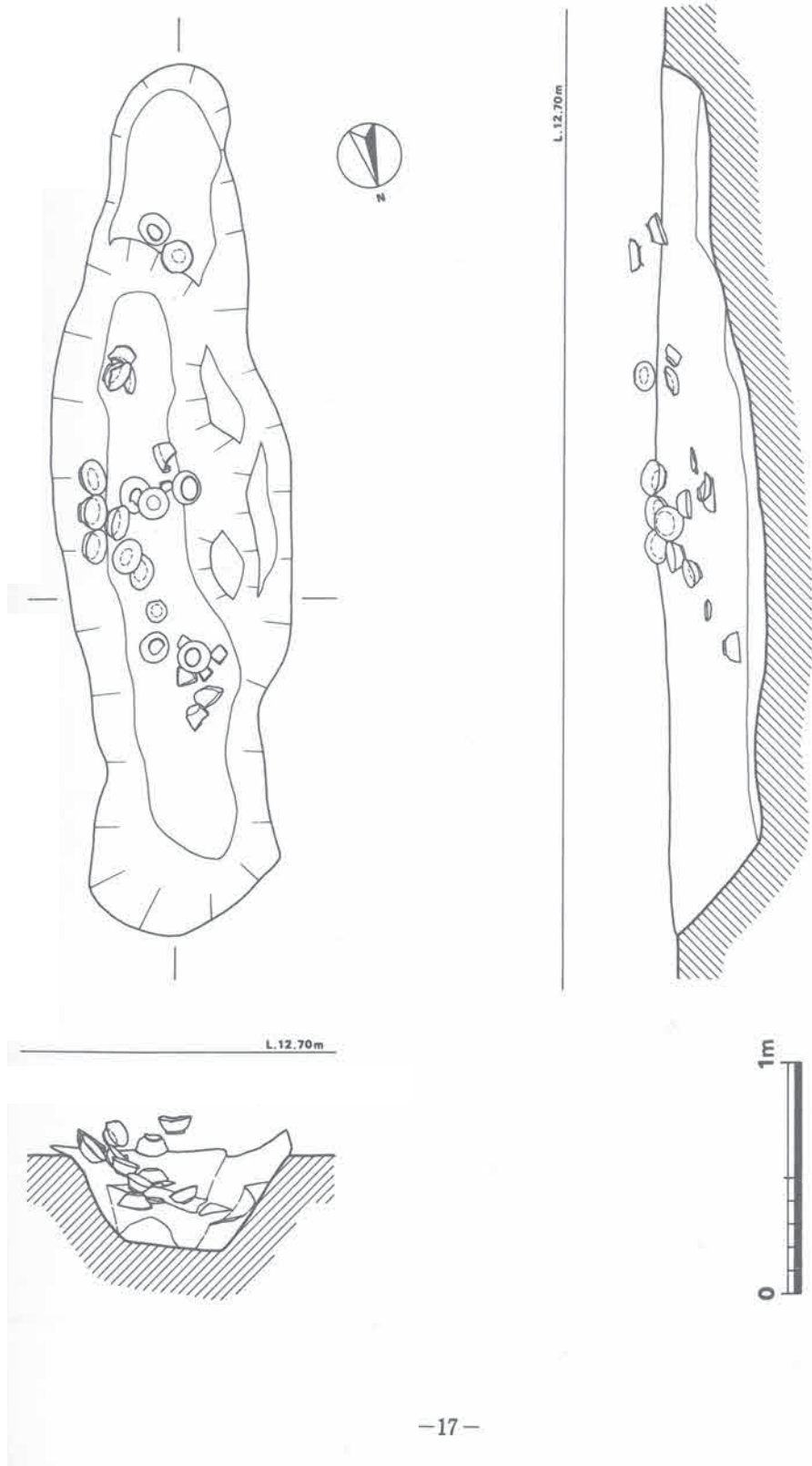
S D 2425 調査区北端で検出された北へ延びる溝である。形態はS D 2397・2404の様相と異なっており、北端部は土壇状を呈している。南端部の、壁面は緩やかに傾斜する。溝内からは、多量の土師器、須恵器や瓦類が発見され、しかも完形品もかなりの数が出土した。

土壇

本調査において、土壇は多数検出した。しかし性格的なものは明確にすることができなかった。ここでは特に遺物を出土するものと、土壇に共通するものについて述べる。

各土壇は、不規則ではあるが何かの制約でもあるかの如く一線上掘り込まれている。また土壇は自然に埋ったものでなく、人為的に埋められていることが層序の観察で確認され、隣接する土壇では切り合い関係にあるものもある。特に S A 2451 に沿って掘られた土壇群と、S A 2452





第11図 SX2395実測図 (1/30)



第12図 整地土層範囲図 (1/200)

の南の土壇群では切り合い関係が確認できた。

SK2402 築地コーナ一部分で確認された不整形の土壇である。径は約1m、深さ約30cmを測り、底面は摺鉢状を呈する。SD2004によって切られている。遺物は、土師器をはじめ黒色土器等が出土した。

SK2429 郭内のSB2436とSA2437の中間に位置する。一辺約0.8m、深さ約16cmを測る隅丸方形の土壇である。周囲からは、同様な遺構は確認されず性格は不明である。

その他の遺構

SX2395 調査区北端部で確認されたものである。長径約3.7m、短径(最大径)1m、深さ約0.5mを測る。掘り方は、不整形を呈し、各所に平坦面を有する。土師器碗の完形土器の出土する状態から判断して、墳墓の可能性も考えられる。遺物は、土師器碗を主として、緑釉陶器、青磁、鉄製品などが出土した。

SX2388・2438 築地外側に沿って検出されたもので、幅約3～4mを測る。遺構東壁は約30cmほどの立ち上がりが見られ、床面は一面に凹凸状を呈している。床面の凹凸の状態は、石敷を取り去った後の様相を呈し、約20cm大の川原石が残る所もあった。遺構内は、堅固に突き硬められた整地土が堆積し、床面の凹凸の隅々まで入り込んでいる。その範囲はSD2377を覆うまで広がっている。整地土層には、多量の遺物が含まれており、その一つ一つは小さく砕かれていた。また川原石も多く土層中に入っており、床面にあったものが起されたものであろう。整地土層から出土する遺物は、土師器をはじめ、青磁、白磁、鉄製品などが発見された。

SX2352 調査区の西端で検出した弧状の溝である。幅約30cm、深さ約6cm、長さ約3m確認した。性格は、遺構の一部を検出するのみで詳細は不明である。

出土遺物

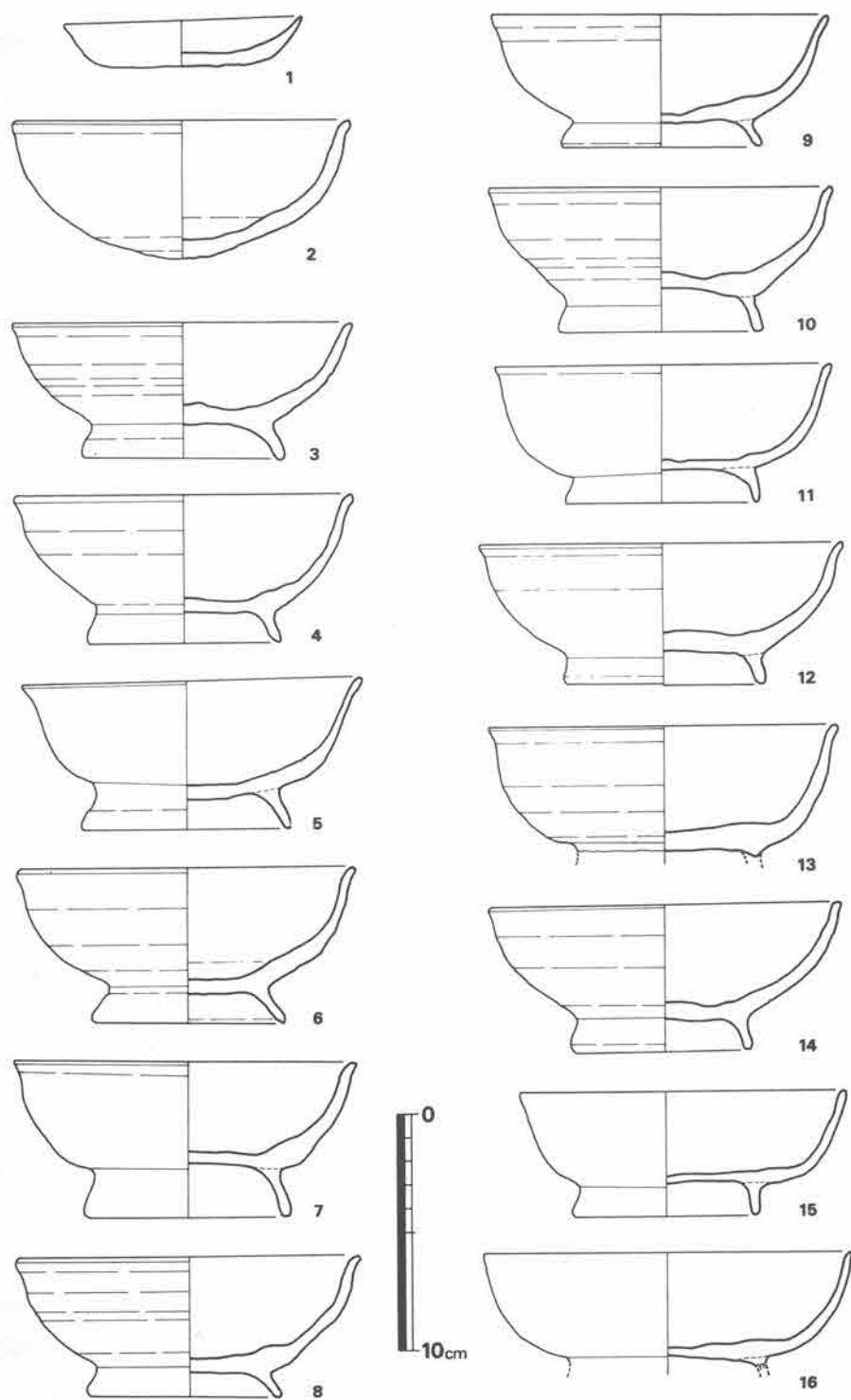
SX2395出土土器 (第13図)

遺構からは、多くの遺物が出土するが、今回はその一部を掲載した。

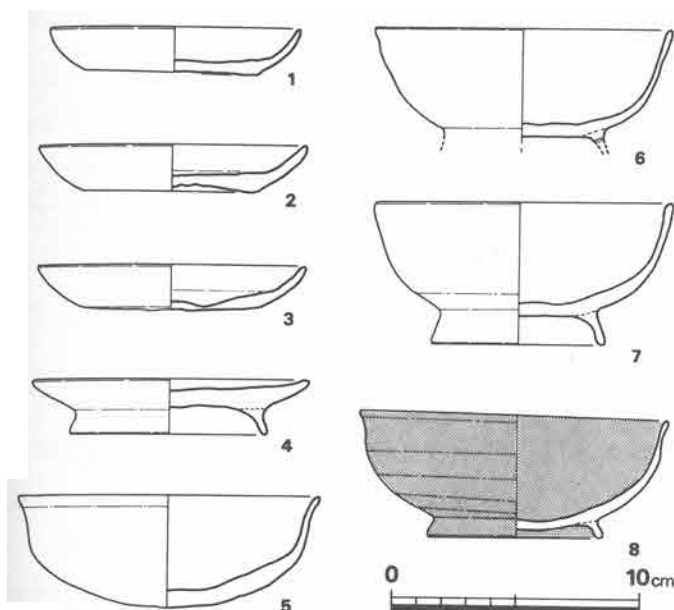
土師器 1は皿で、底部にはへら切り痕が残し、胎土、焼成ともに良好である。口径10.1cm、器高1.9cmを測る。2～16は、すべて高台付碗である。口径13.9～15.8cm、器高4.9～6.6cmを測る。形態は、碗部は、丸味を持つ体部から口縁端部で外反するものと、内彎するもの。高台部は、外へ張り出すものと、垂直に立つものの要素が見られるが、掲載した遺物を見るかぎりでは、これらの要素がそれぞれ組み合わさったものである。時期は、10世紀後半代に比定できよう。

SK2402土壇出土土器 (第14図)

土師器 1～3は小皿で、底部にへら切り痕が残っている。口径は10.2～10.8cm、器高は1.8～1.9を測る。底部との境を有して体部は内彎し、口縁端部は丸く収めている。4は高台付小皿で、口径11.2cm、器高2.2cmを測る。浅い皿部に、やや張り出し気味で細味の高台を有する。5



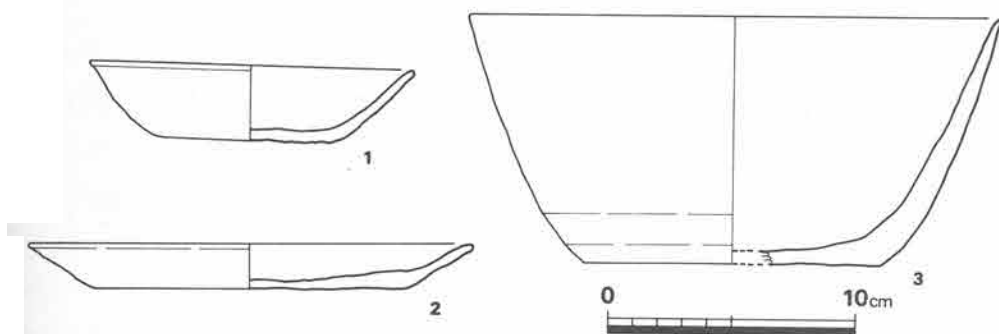
第13図 S X2395出土遺物実測図 (1/3)



第14図 SK2402土坑出土遺物実測図 (1/3)

は碗で、口径12.2cm、器高4.5cmを測る。丸味を持つ底部に外反する体部を有する。6、7は高台付碗で、口径12~12.4cm、器高5~5.8cmを測る。やや平坦な底部に内彎する体部を有する。高台は、6は欠損するが、7はやや外側へ踏張った様相を呈する。

黒色土器 8は高台付碗で、口径12.2cm、器高5cmを測る。丸味を持つ底部に内彎する体部、口縁端部はやや外反する。ヘラによる



第15図 SK2429土坑出土遺物実測図 (1/3)

調整は丁寧に行なわれている。

SK2429土坑出土土器 (第15図)

土師器 1は杯で、底部外面はヘラ切り痕が顕著で、体部内外面はヨコなで、底部内面はナデ調整である。口径13.1cm、器高3.0cmを呈する。胎土、焼成ともに良好。色調は褐色（一部黒灰色）。2は皿で、平な広い底部に口縁部は大きく外反する。底部外面はヘラ切り痕を残す。口径18cm、器高1.8cm。胎土、焼成ともに良好、色調は黄褐色。3は鉢で、底部外面はヘラ切り痕が著しく、体部外面下方にはヘラ削り調整が施されている。底部外面及び体部外面の一部には媒の付着が認められる。口径21.6cm、器高9.9cm、底径12cm。胎土、焼成ともに良好で、色調は黄褐色を呈す。

小 結

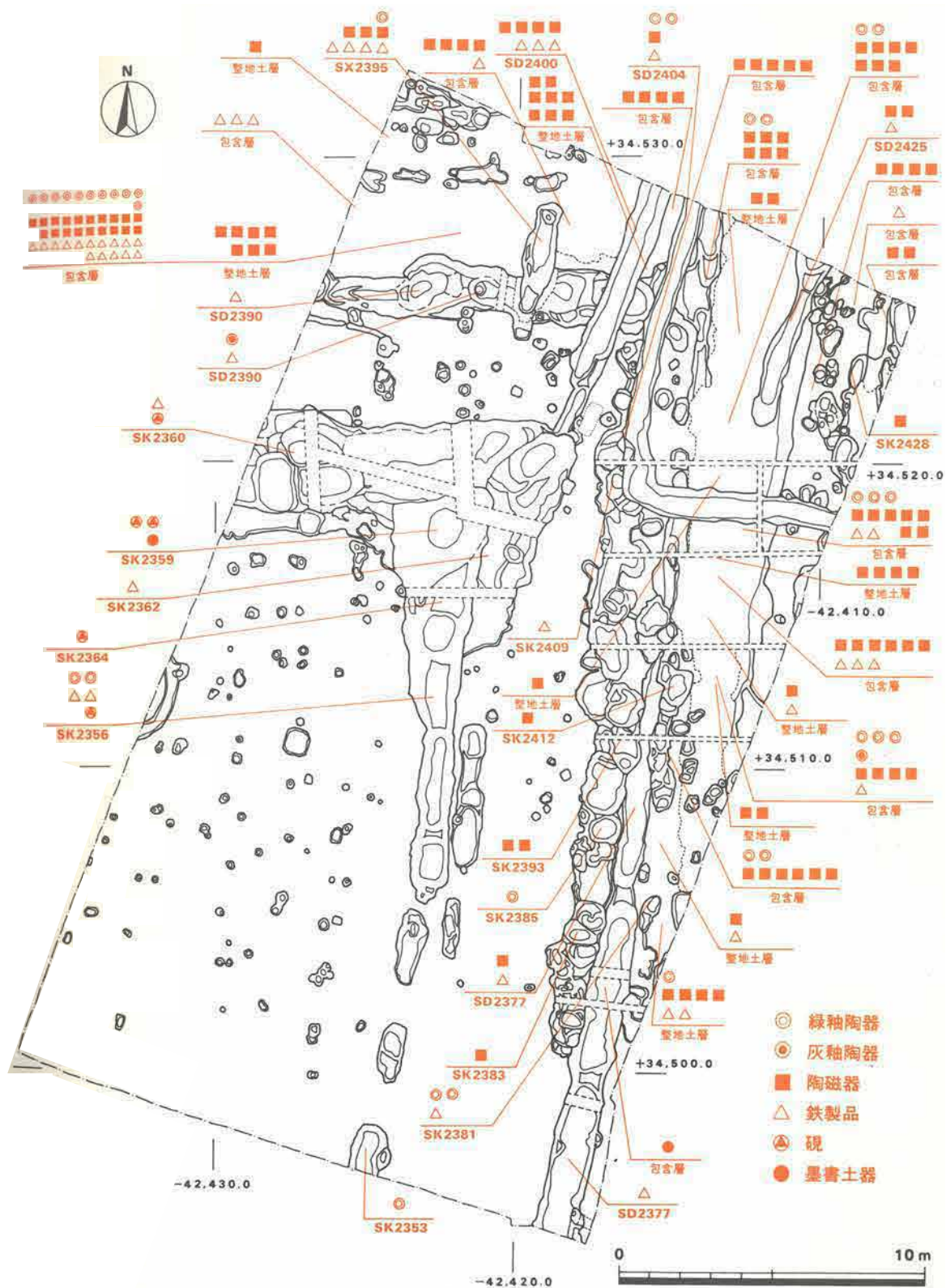
第50次調査は、排土の関係上発掘対象面積の3分の2ほどを、2月10日まで調査し、現在は3月30日迄の予定で北側を拡張発掘調査中である。故に遺構の延長もあり、新たな資料も発見されている。また遺物も水洗中で、検討するまでに至らなかった。今回は、当初に調査を実施した範囲の主たる遺構の概要を述べたにすぎず、今後の成果は次回の報告に譲りたい。

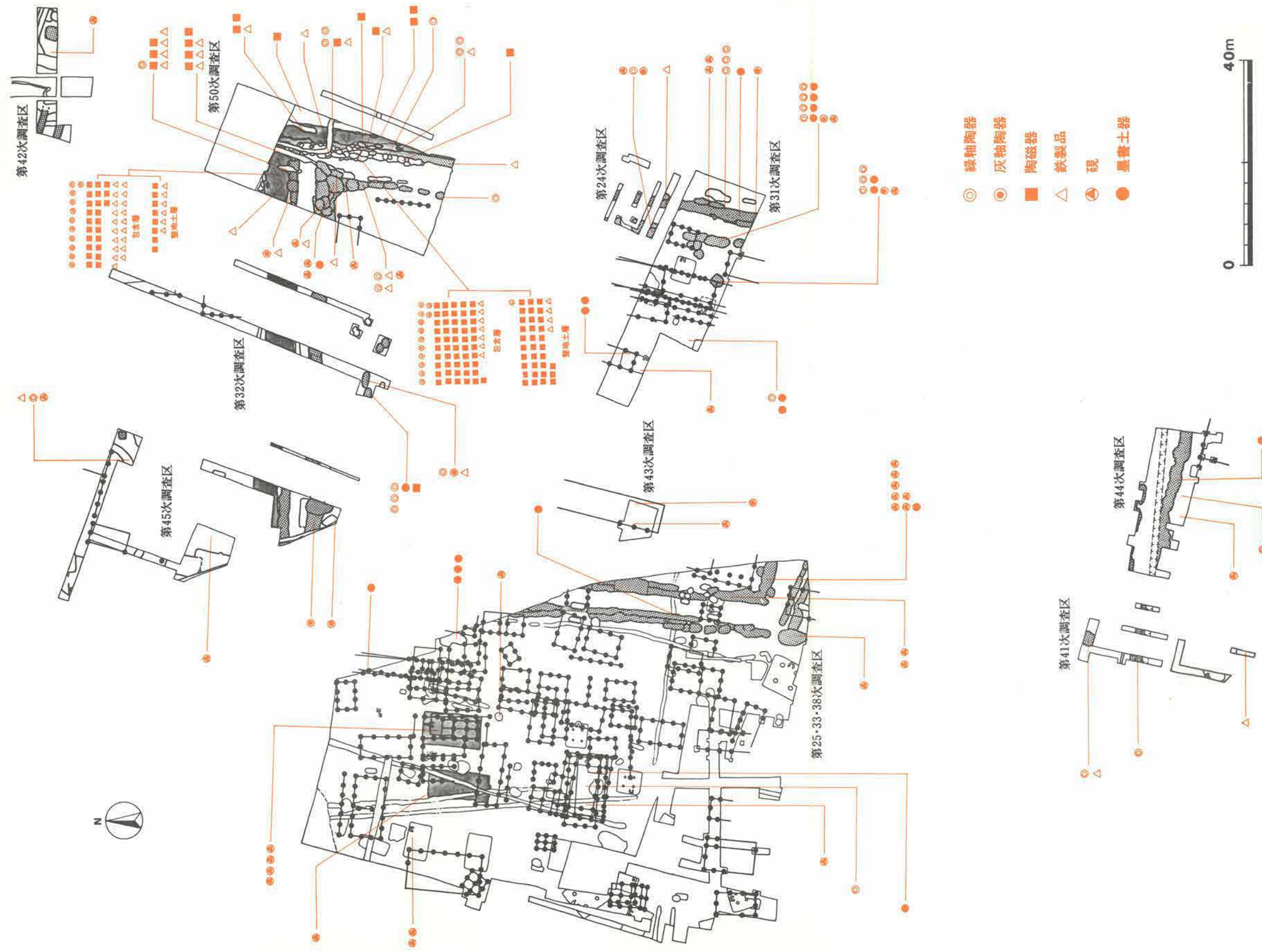
VI. ま と め

本年度は4地点について発掘調査を実施し、多くの成果を得ることができた。各地点の調査結果については前述した通りであるが、特に第49次調査では字葉山地区に奈良～平安時代前期頃の官衙跡が広がっている可能性が強くなった。

この葉山地区の官衙は国衙跡と推定される風祭地区官衙とは小さな谷を挟んで、西方約200mに位置している。このように国衙域から離れて営まれたと考えられる官衙跡は、同じく国衙域の北方約300mの字東地区、北東約200mの字立石地区にも想定され、国府域における官衙地区のあり方に複雑な問題を提起している。

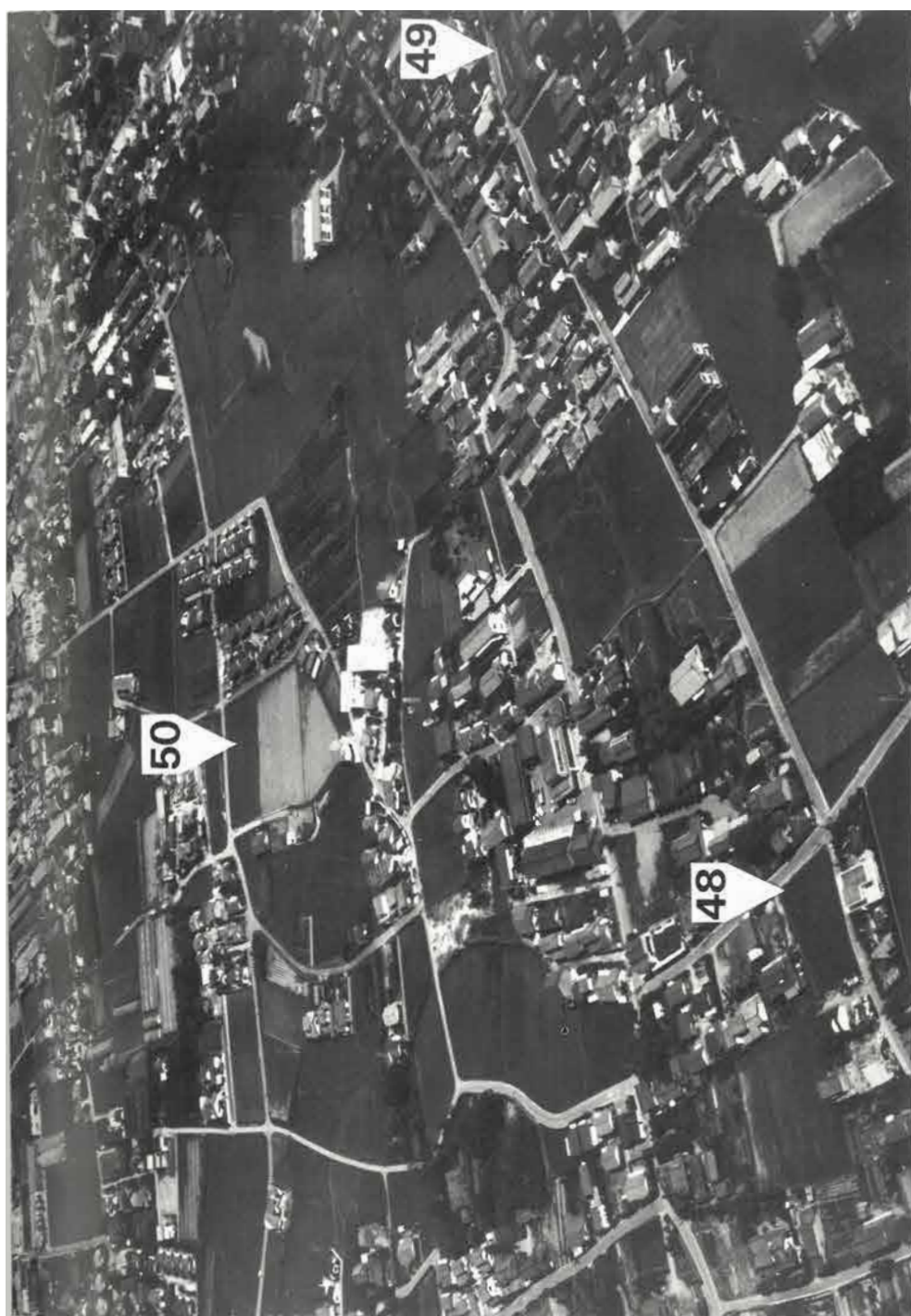
第50次調査は国衙推定地の内郭北東部付近で実施したものである。調査の結果、築地本体はすでに削平を受けて消滅しているが、築地に沿って掘られたとみられる溝や土壇群の走行性、溝等に投込まれた版築塊の検出により、かつて内郭を画する築地が存在したことが明らかになった。また、この内部の平面形は台形状を呈しており、すでに明らかになっている諸国の国衙跡では例をみない。果してこの台形状区画が国衙域の内郭（政庁域）と考えることができるか疑問であるが、第17図に示したように推定国府域内では官衙的性格の強い遺物が特にこの台形状区画周辺に集中しており、この地区が国衙の重要な地点であることには間違いなであろう。特に「介」・「守弟」などの墨書土器、豊富な陶硯類・施釉陶器、第50次調査における多量の越州窯系の中国輸入陶器の出土はそれを物語るものといえよう。





第17図 国衙域出土主要遺物一覧 (1/800)

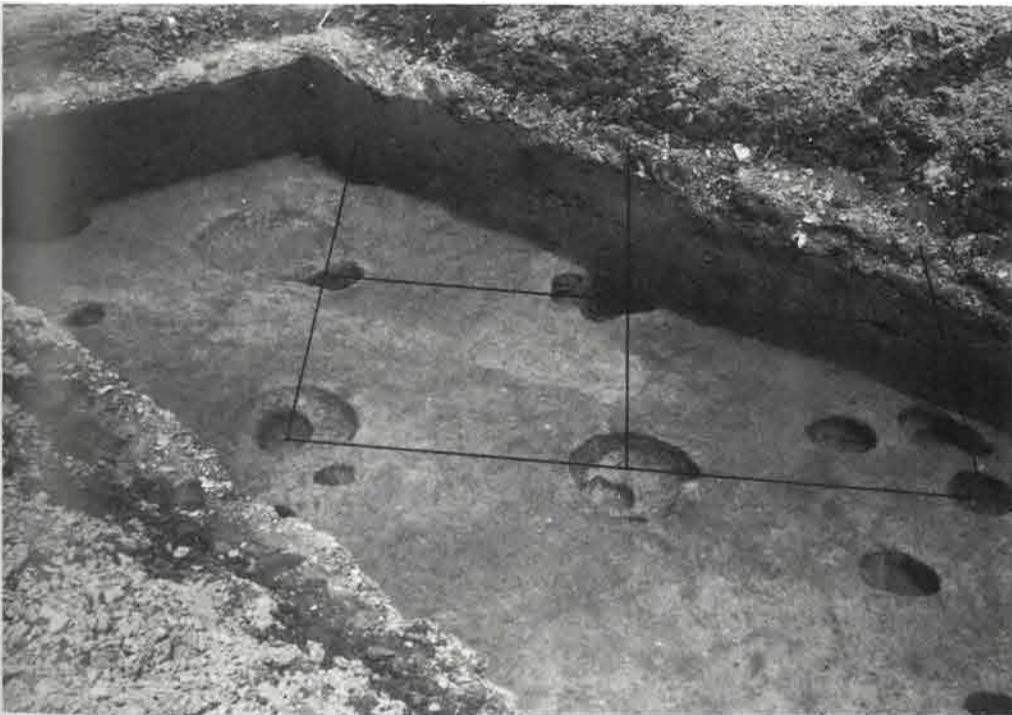
版 図



第48, 49, 50次調査区航空写真（西から）



第47次調査区全景（北から）



S B 2047建物（西から）



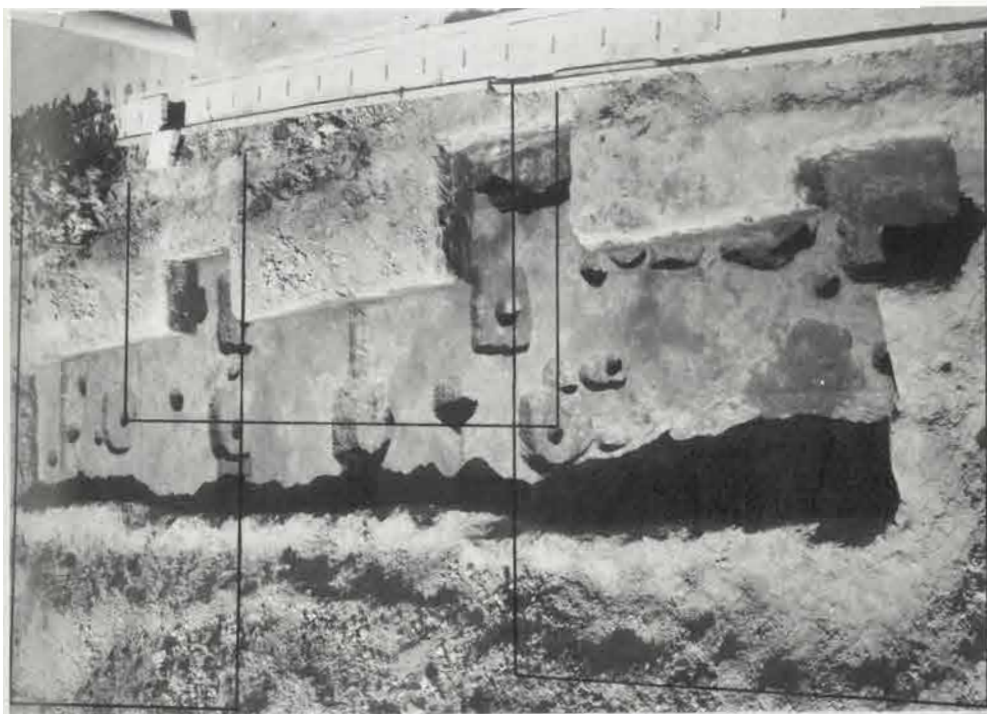
第48次調査区全景（西から）



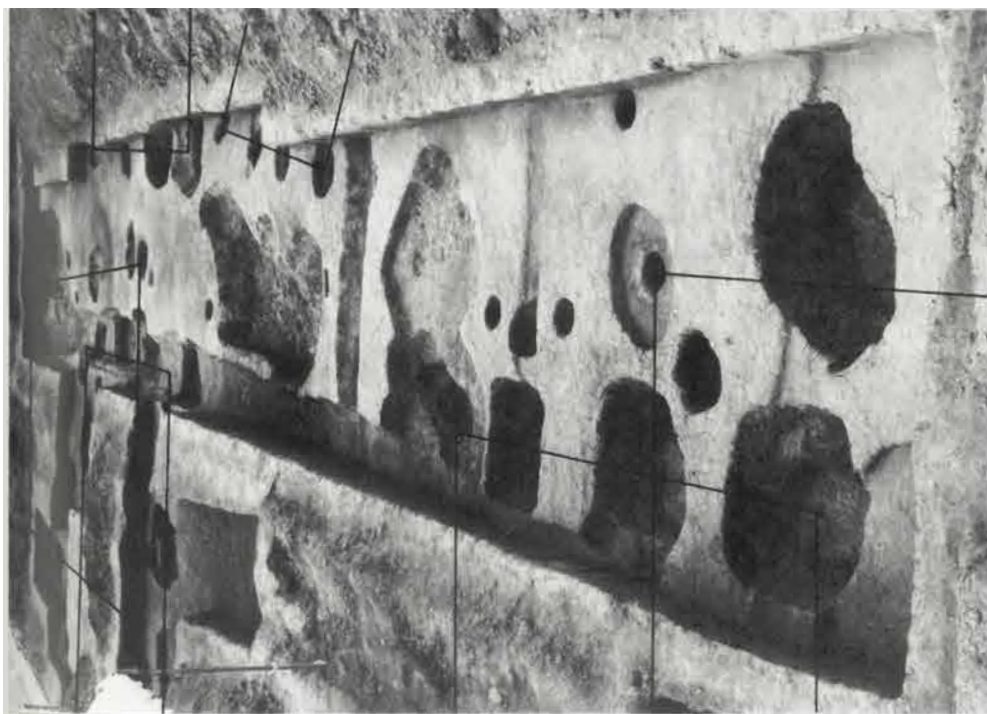
第48次調査区全景（東から）



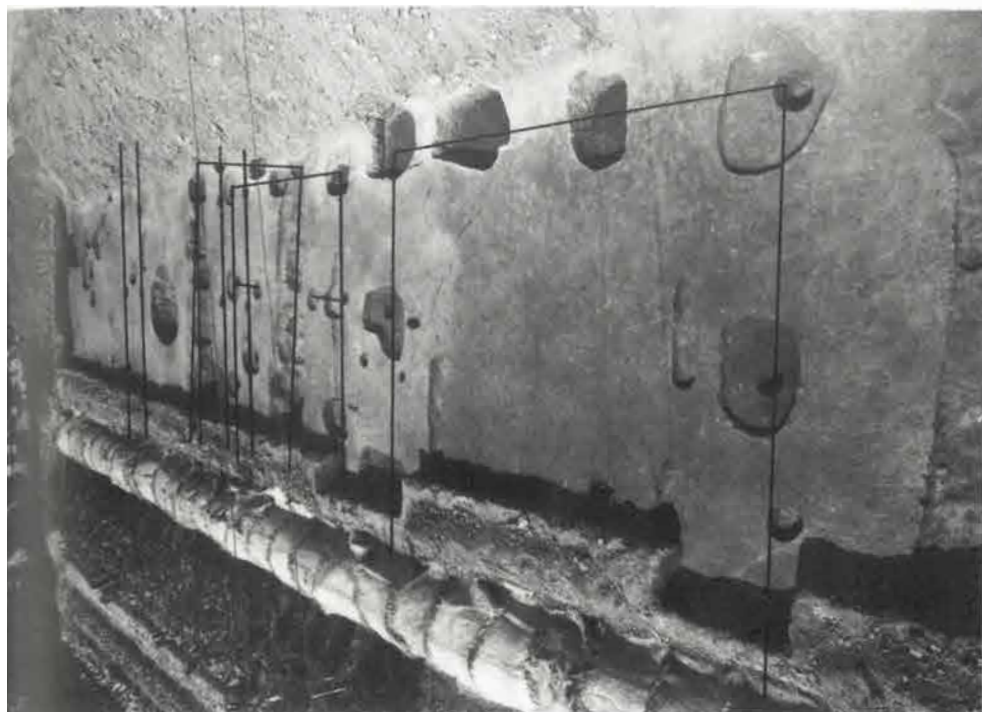
S B2101竪穴住居, S D2103a・b 溝（南から） 溝（南から）



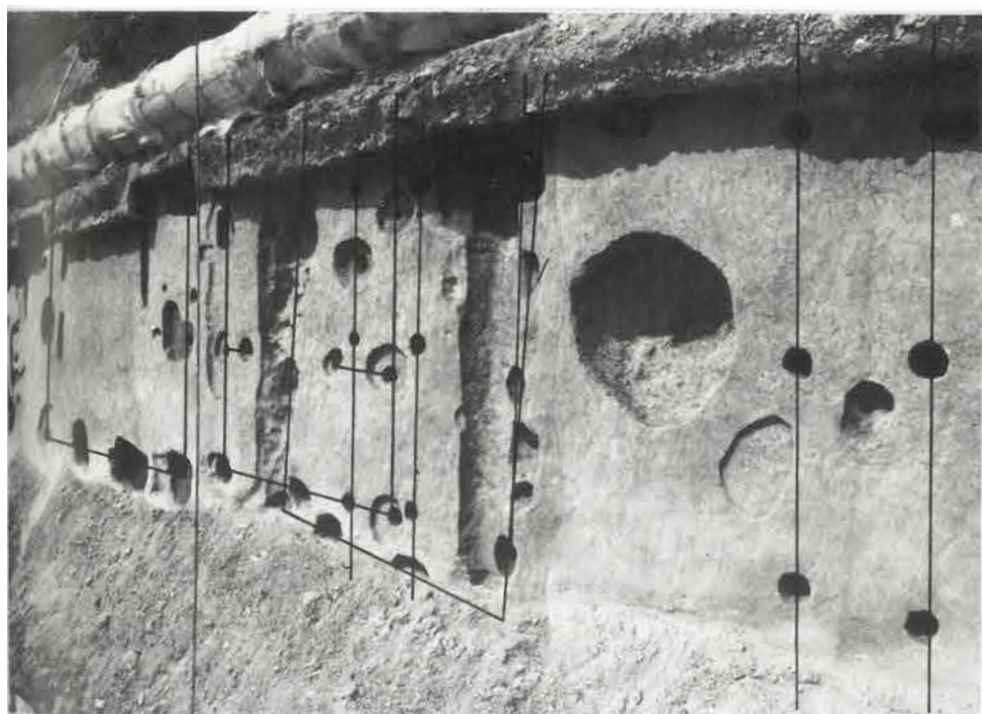
第49次調査区東部全景（南から）



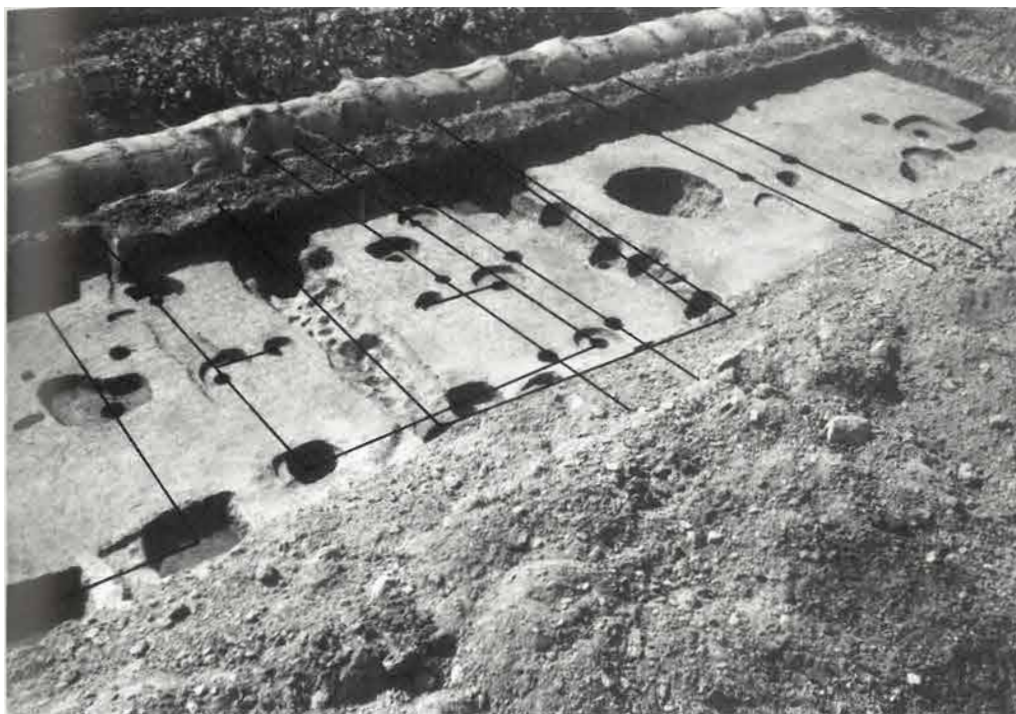
第49次調査区中央部全景（北から）



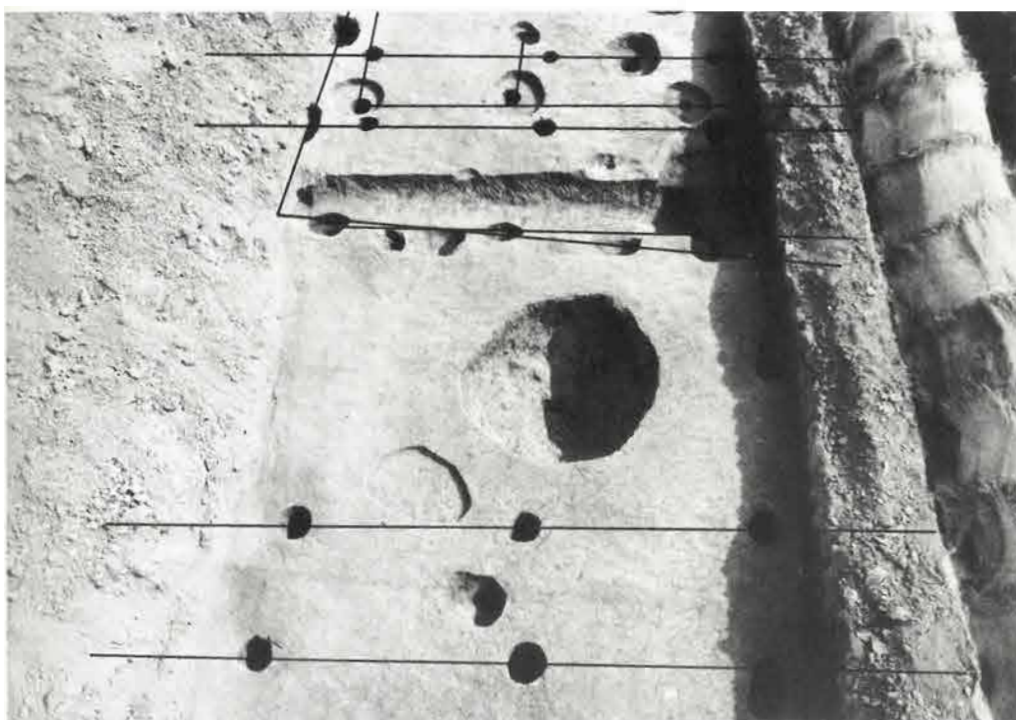
第49次調査区西部全景（南から）



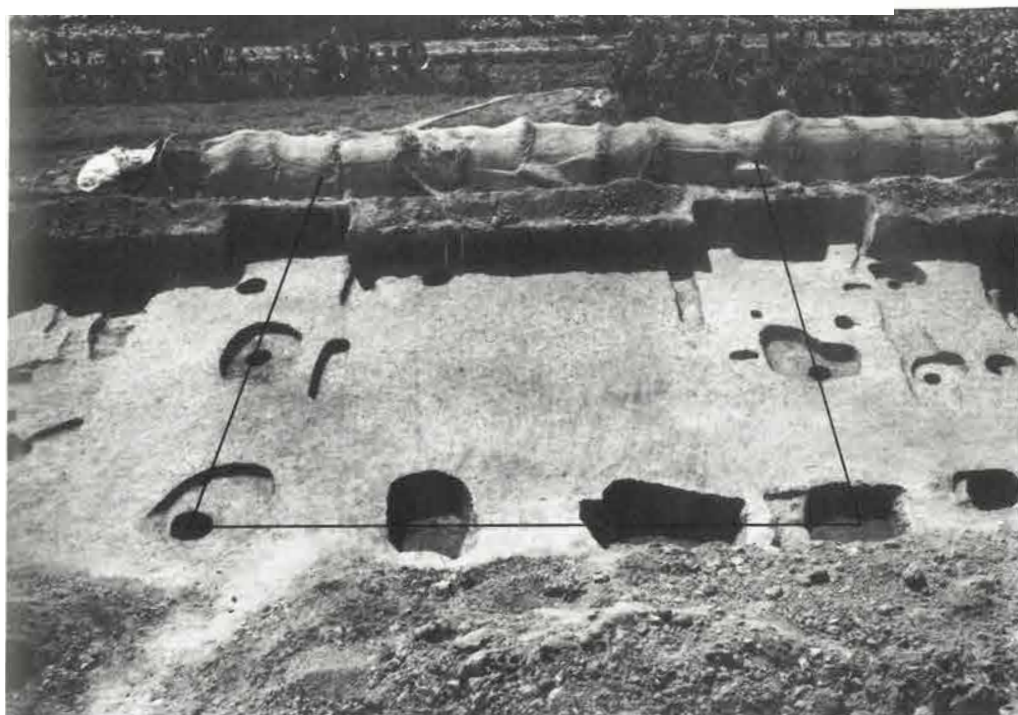
第49次調査区西部全景（北から）



S B 2262, 2292建物（東から）



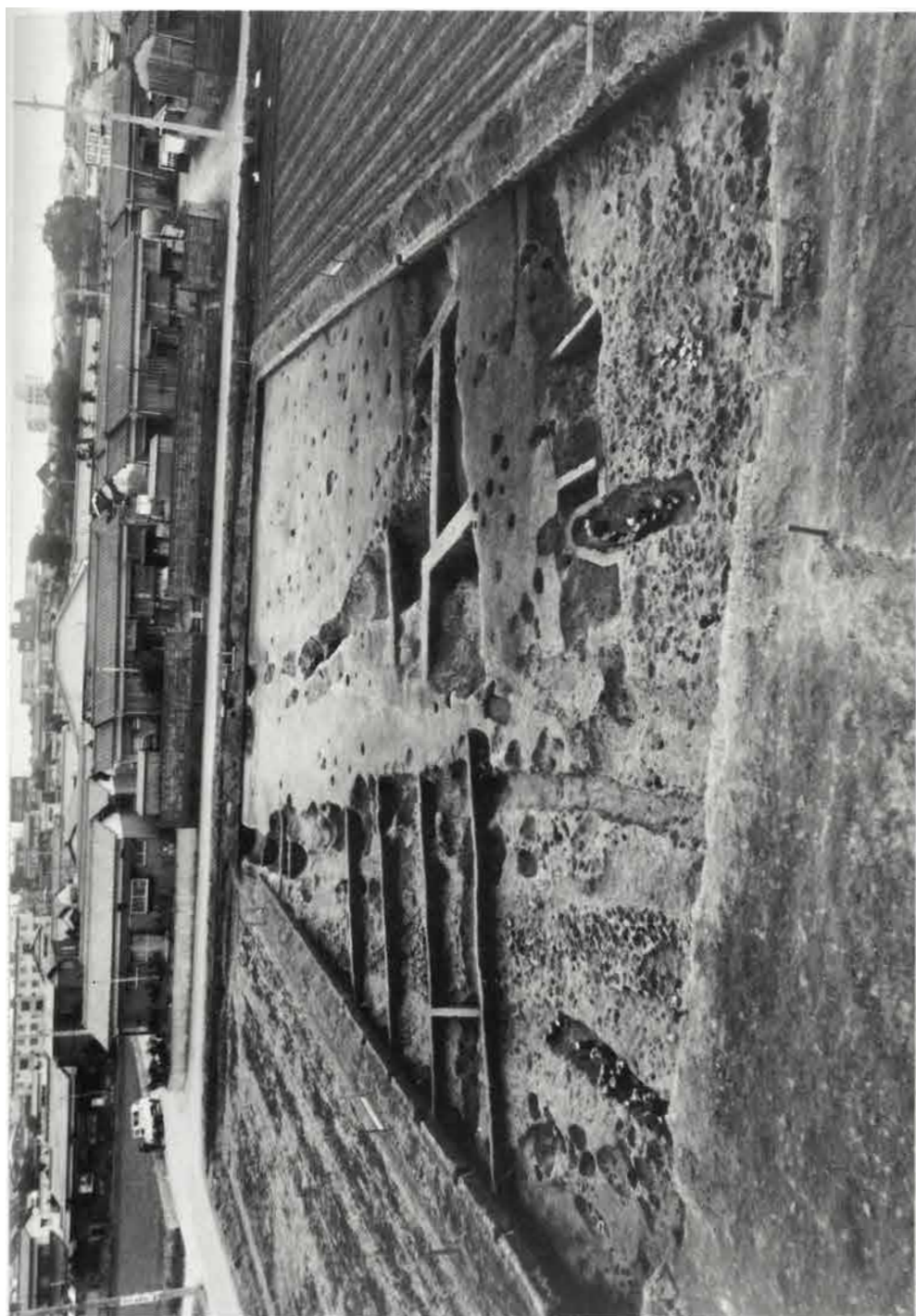
S A 2265, 2274柵（北から）



S B 2260建物（東から）



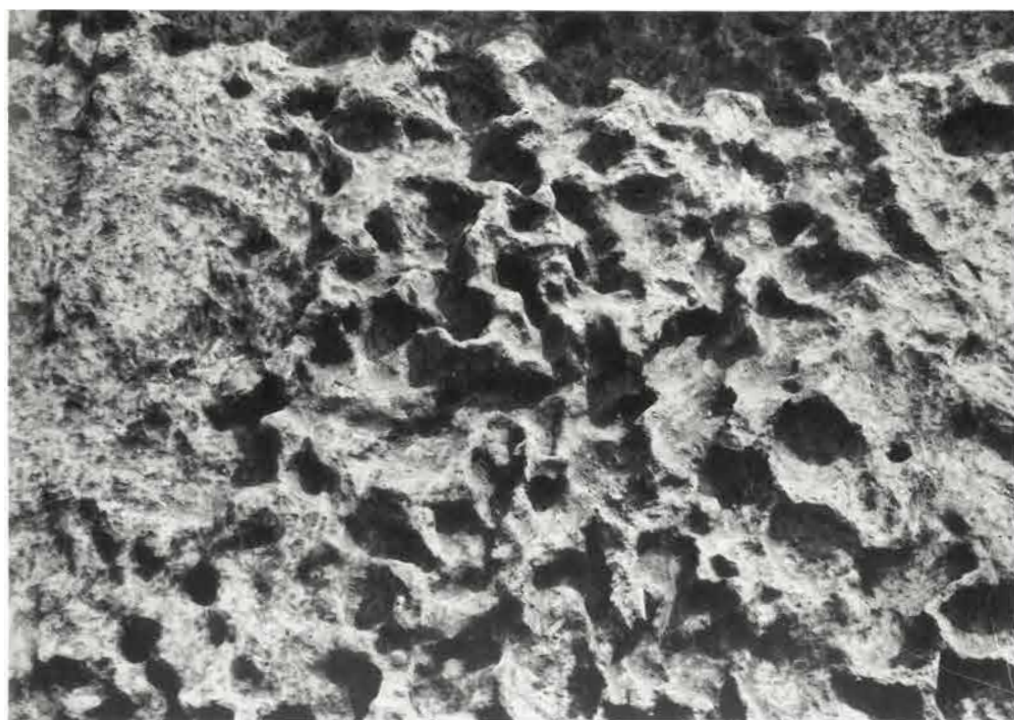
S B 2243建物（西から）



第50次調査区全景（北から）



第50次調査区東半部全景（北から）



整地層除去後の地山面（北から）



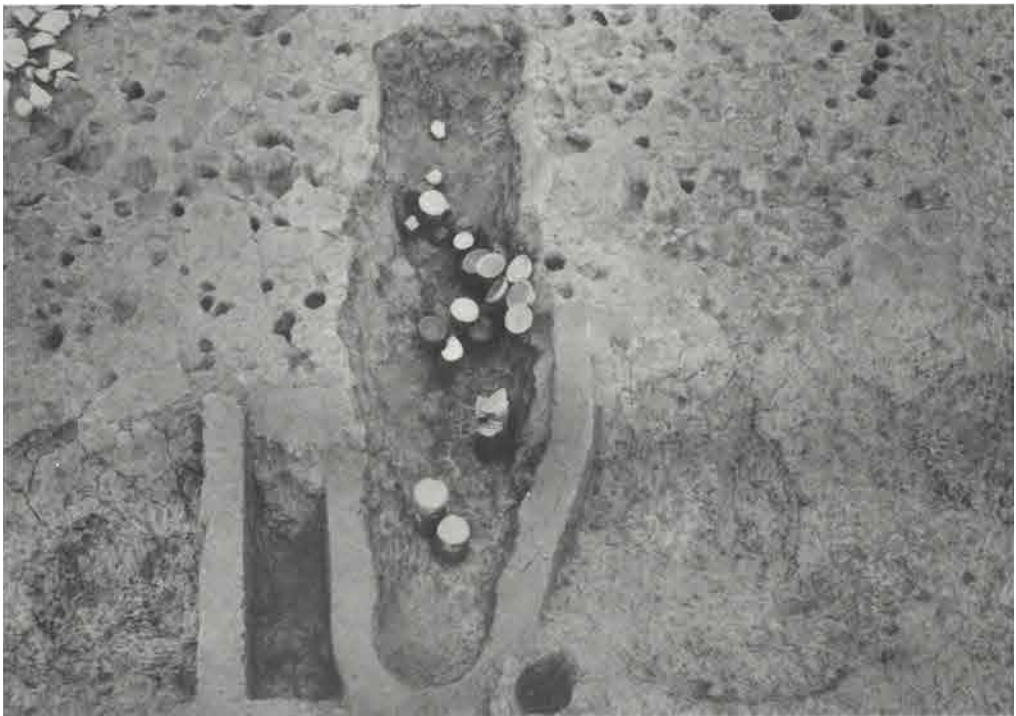
S D 2425 溝 (南から)



S D 2425 溝 遺物出土状況 (西から)



S D2377土層堆積状況（北から）



S X2395遺構（南から）



S X2395出土遺物

跡寺分国後筑

— IV —

昭和56年度発掘調査概報

例 言

1. 本書は昭和56年度に久留米市教育委員会が実施した、久留米市国分町所在筑後国分寺跡の発掘調査概要の報告である。
2. 発掘調査は文化部文化財担当の櫻井康治、松村一良が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、櫻井・松村が行ない、遺物の実測図は大石昇、萩原裕房が作成した。写真撮影、製図は櫻井、立石雅文が担当した。
4. 本書に示す方位「N」はすべて真北方位を指すものであり、遺構表示については下記の略記号に拠る。

S A……築地・塀・柵

S D……溝・濠

S K……土坑

S X……その他の遺構

5. 本書の執筆、編集は櫻井が担当した。

目 次

I 調 査 経 過	25
II 第 21 次 調 査	27
III 第 22 次 調 査	30
IV 小 結	33

挿 図 目 次

第 1 図	筑後国分寺跡発掘調査地域図	26
第 2 図	第21次調査遺構配置図	28
第 3 図	第21次調査出土遺物実測図	29
第 4 図	第21次調査出土遺物実測図	29
第 5 図	第22次調査遺構配置図	31
第 6 図	第22次調査 S A 400 築地断面図	32
第 7 図	第22次調査出土遺物実測図	33
第 8 図	第22次調査出土遺物実測図	33
第 9 図	主要遺構配置図	34
第10図	市指定史跡「筑後国分寺跡」地域図	35

表 目 次

第 1 表	筑後国分寺跡発掘調査一覧表	25
-------	---------------	----

I 調査経過

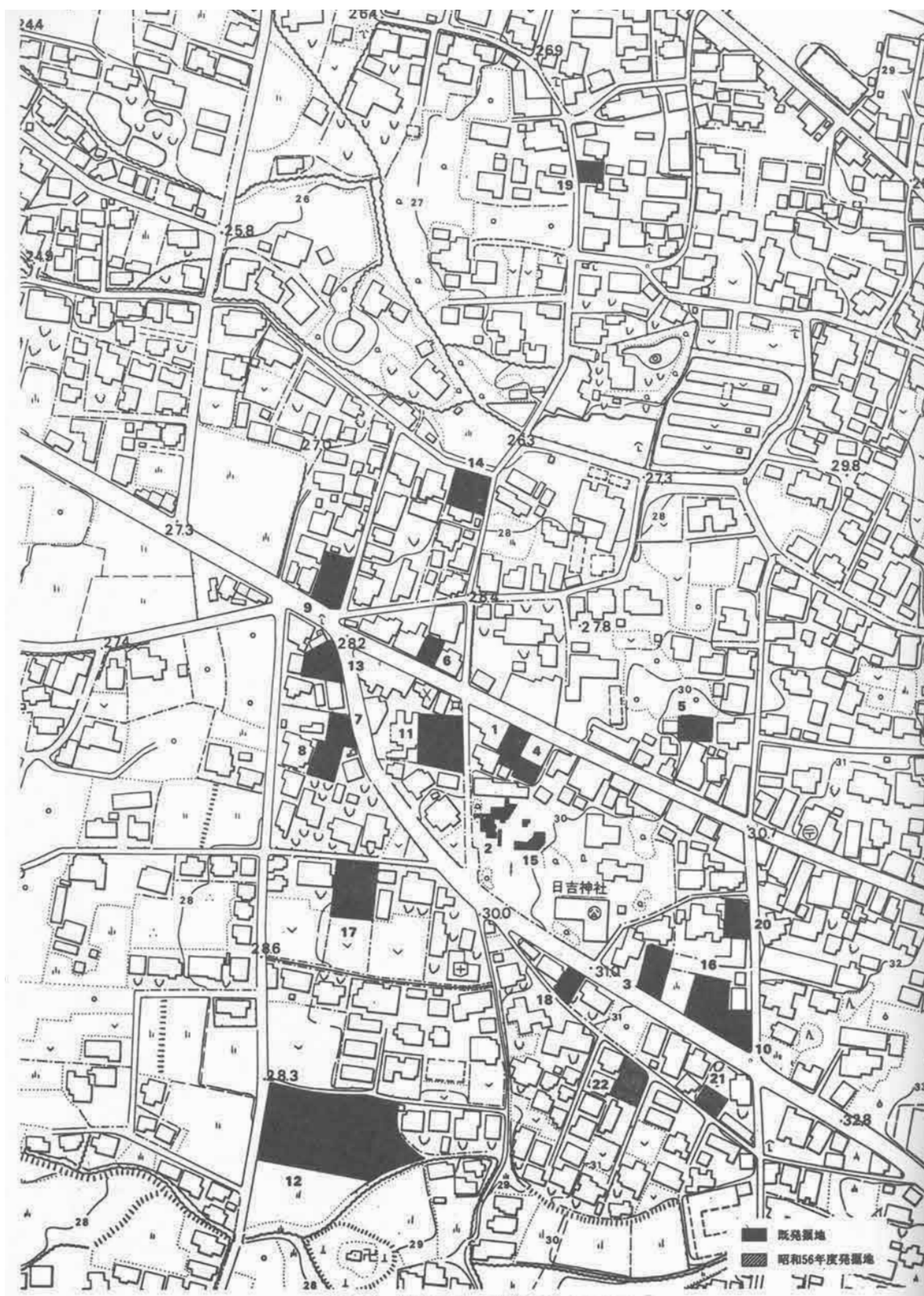
昭和56年度における、筑後国分寺跡の発掘調査は、専用住宅建築に伴う事前調査の2件のみであった。いずれの調査も、期間的余裕がなくトレンチ調査を実施せざるを得なかった。第22次調査地は、約50cm程の盛土工法による木造住宅建築であるため直接遺構には、影響は考えられない。調査の結果、東西両方の溝状遺構および土壇、ピットをそれぞれ確認した。溝状遺構は、僧寺々域の南限を画するものと考えられる。

本年度、6月1日付をもって講堂・塔及び回廊跡の一部を市指定史跡として指定した。

発掘調査の実施にあたり、東国分公民館ならびに各土地所有者、発掘作業に携わられた高良内町の各位、また史跡指定に関して日吉神社総代の方々には、多大の御協力と御理解をいただき、付記して深く謝意を表わしたい。

年度	調査 回数	調 査 地	調査 面積	調 査 期 間	備 考
44		久留米市国分町字谷711-1	187 ^(㎡)	1969. 4～1969. 5	
49		〃 〃 字宮ノ脇745-6	140	1974. 8	
52	1	〃 〃 字谷706-4	56	1977. 7	講堂跡
	2	〃 〃 字谷711-1	155	1977. 9～1977.12	
	3	〃 〃 字宮ノ脇743-16	11	1977.11	
	4	〃 〃 字谷706-7	19	1977.12	
	5	〃 〃 字谷671-1	20	1978. 2～1978. 3	
	6	〃 〃 字大木下719-22	21	1978. 3	
53	7	〃 〃 字大木下717-1	24	1978. 6	
	8	〃 〃 字大木下715-1	100	1978. 8～1978.10	
	9	〃 〃 字馬場田120-5	52	1978. 9	
	10	〃 〃 字宮ノ脇745-8	28	1978.10	築地跡
	11	〃 〃 字谷718-1	140	1978.12～1979. 1	築地跡
	12	〃 〃 字政所729-1・字白川782-1	188	1978.12	
54	13	〃 〃 字大木下719-5	42	1979. 5	
	14	〃 〃 字馬場田1206	15	1979. 6	
	15	〃 〃 字谷711-1	90	1979. 9～1979.10	講堂跡
	16	〃 〃 字宮ノ脇743-17,-22	255	1979.11 1980. 9～1980.10	
55	17	〃 〃 字政所727-2	35	1980. 4	
	18	〃 〃 字宮ノ脇742	70	1980.10～1980.12	塔跡
	19	〃 〃 字西村497	40	1980.11～1980.12	
	20	〃 〃 字宮ノ脇744-3	60	1981. 1～1981. 2	築地跡
56	21	〃 〃 字宮ノ脇746-1	35	1981. 5	築地跡
	22	〃 〃 字宮ノ脇747-6,-23	50	1981. 8～1981. 9	築地跡

第1表 筑後国分寺跡発掘調査一覧表



第1図 筑後国分寺跡発掘調査地域図

II 第 21 次 調 査

1 調 査 の 経 過

第21次調査は、専用住宅建築に伴う事前の発掘調査である。当該地は、僧寺の塔跡の東南約90mにある。周囲の現況は、住宅が建て込んでおり旧状を想像するのは困難であるが、調査地の南、従来住宅建築の際にかなりの盛土が行なわれているようであり、さらに南へ約50m程に、東西に谷が入り込んでいることは、僧寺々域の南限を、この一帯に推定することができよう。調査の結果、遺構は、地表下約1mの位置で確認され、溝状遺構2をはじめ土壇等が検出された。地番は、久留米市国分町字宮ノ脇746-1である。

2 検 出 遺 構

溝

S D 380 東西に走向する溝状遺構である。幅は80～110cm、深さ10～30cmを測り、約7.5mを確認した。形状は、ほぼ直線的であるが、幅は東のほうは細くなる。底面は東より西へ深くなり、平坦な底面を呈している。出土遺物は、均整唐草文軒平瓦瓦当片1、土師器、須恵器等の破片が発見されたが時期を確定するものではない。東端部においてS D382と直交するが、確認した遺構の状況では東へは延びていない、また埋土の色調や性質等は、ほとんど同質で切り合い関係を確認しえなかったことは、S D380溝はS D382と同一のものとも考えられる。

S D 382 南北に走向する溝状遺構である。幅約40cm、深さ約10cmを測り、長さ約2.5mを確認した。S D380とほぼ直交するが、同一時期の溝か別の時期の溝かは不明である。また北へ延びるものかも判断しがたい。遺物は、ほとんど見られなく平瓦片が1片のみであった。

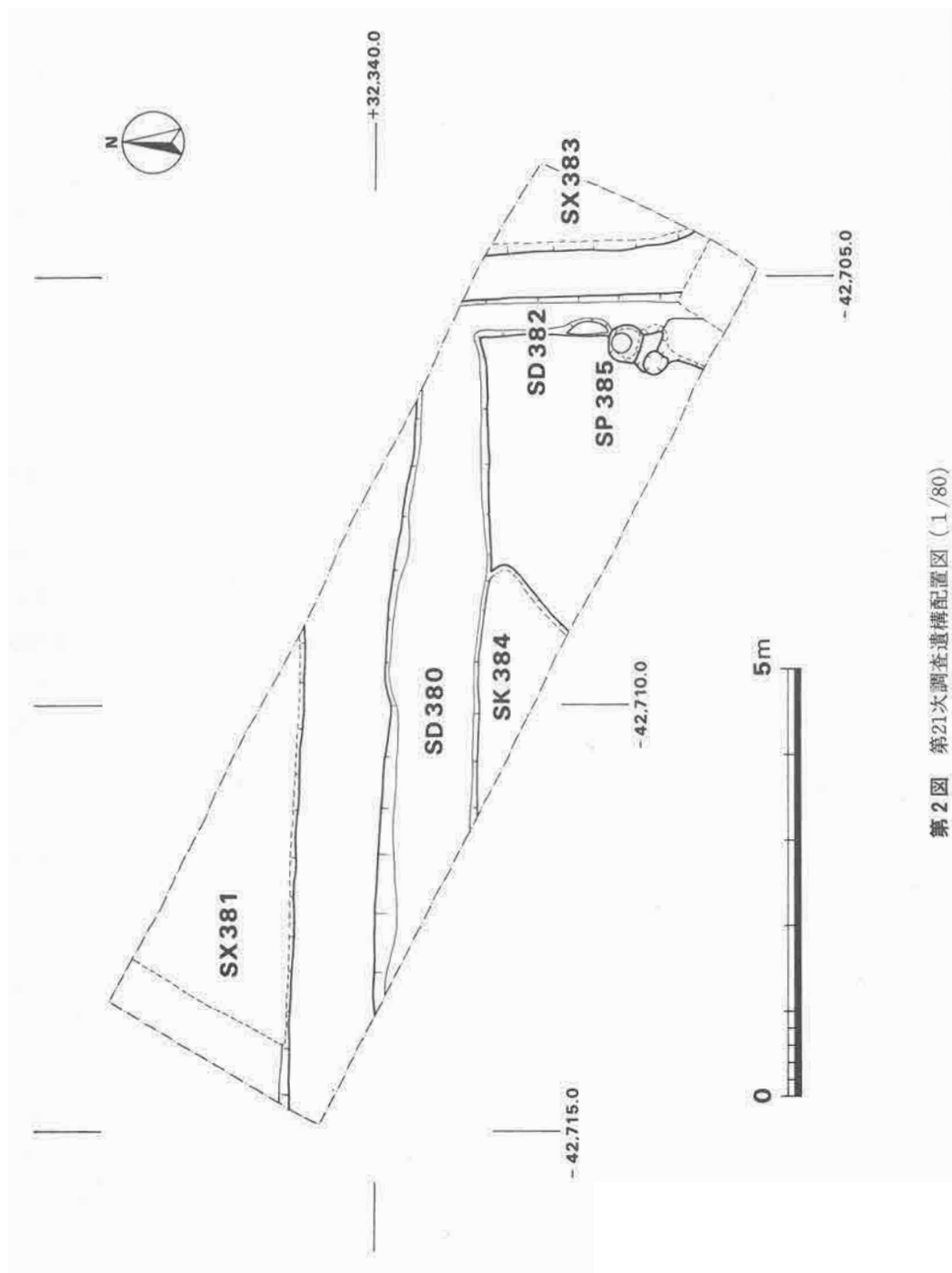
土 壇

S K 384 方形の土壇状遺構である。北辺は約2mを測り、東西辺は約1mを確認した。S D380に切られており、出土遺物は、須恵器片、土師器片瓦が多数発見された。

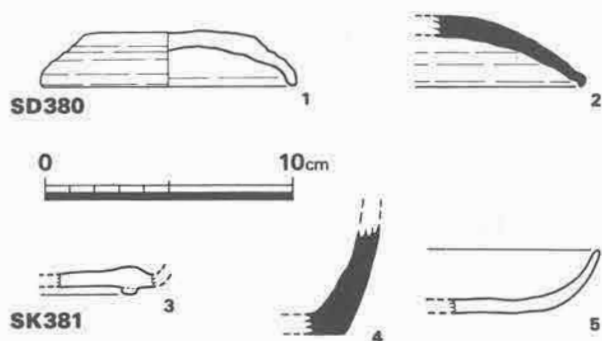
その他の遺構

S X 381 遺構のごく一部を確認したのみであり性格、規模等の詳細は不明である。確認したのは、S D380に並行する南辺部分の約5.6mを確認した。遺構の壁面の立ち上がりは、約30cmほどであり、底面は若干の凸凹があるものとする。遺物は、土師器片と軒丸瓦の瓦当部が出土した。

S X 383 遺構の西壁面の一部を確認するのみで性格は不明である。深さは50cm以上あるも



第2図 第21次調査遺構配置図 (1/80)



第3図 第21次調査出土遺物実測図 (1/3)

のと考えられる。壁面は、SD 382と並行する。

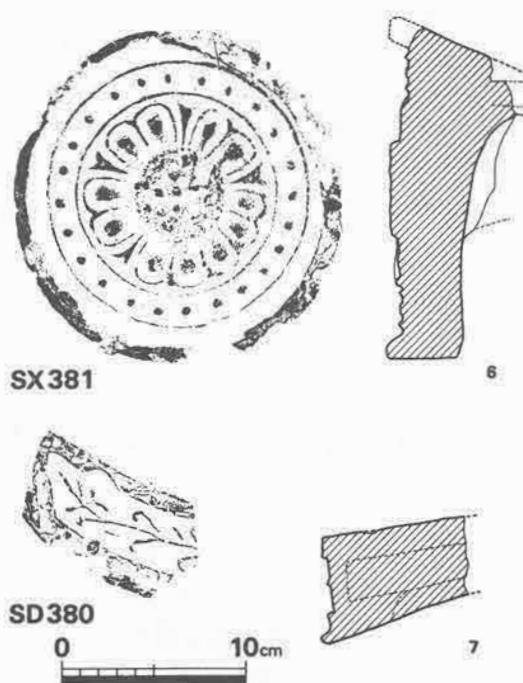
ビット

SP 385 トレンチ東端部に1つだけ確認されたものである。径約40cm程の円形であり、内には柱痕を確認した。この柱穴はSD 382より新しいものであり、遺物として須恵器大甕の破片を発見した。

3 出土遺物 (第3・4図)

遺構から発見された遺物は、ごく少数で図示できるものも少ない。

1は、土師器杯蓋である。口径10.3cm 器高2.2cmを測る。天井部は篋削りされ体部との境に稜を有する。口縁端は、体部からやや折れまがって垂直につまみ出されている。内面は、刷毛調整が丁寧に施こされている。2は、須恵器杯蓋である。残存部分が少ないため口径および器高は不明である。天井部から体部は緩かで境を有せず、口縁端部は折れ曲ってつまみ出されている。焼成が不良で摩耗が著しい。3は土師器杯身の底部の一部で、焼成は堅緻であり須恵器的調整が施してある。4は須恵器壺の底部であり、焼成は非常に良い。5は、土師器杯身で



第4図 第21次調査出土遺物実測図 (1/4)

あり、摩耗が著しい。6は、内区に均整唐草文を陽刻し、外区、脇区に珠文を付した軒平瓦の瓦当部分であり、焼成は良好で堅緻である。色調は灰色を呈している。7は、内区中房に1+4+8の蓮子を配し、蓮子文は変形の複弁六弁を有する。外区内縁は24個の珠文を配して、外縁は素文である。丸瓦部はすでに欠損している。

Ⅲ 第 22 次 調 査

1 調 査 の 経 過

第22次調査は、個人の専用住宅建築に伴う事前の調査である。当該地は、塔跡の東南約60mの位置にある。調査は、トレンチをL字形に設定し、北側の東西トレンチより発掘を始めた。調査結果、遺構は地表下約70cmの黄褐色粘質土の地山で確認できた。地山上約30cm程の厚さの遺物を含んだ黒褐色粘質土層が見られる。遺構は、築地跡大小の土壇及び小ピットを確認した。ピットは柱穴として並ぶものは見られない。地番は、久留米市国分町字宮ノ脇747-16、-23である。

2 検 出 遺 構

築 地

SA 400 南北トレンチの南半分において、確認された東西に延びる築地である。すでに上部は削平されており、基底部と北側のSD394長さ約2mを確認したが、南側は調査地外になるため、築地の幅は不明である。また検出した部分においてもかなりの攪乱がみられる。基底部は、溝の南側に幅約80cmの地山削り出しを行ない犬走りを設け、高さ約20cmほど本体基壇部分が残っている。SD394は、幅約1m、深さ約40cmを測るU字形の雨落溝である。

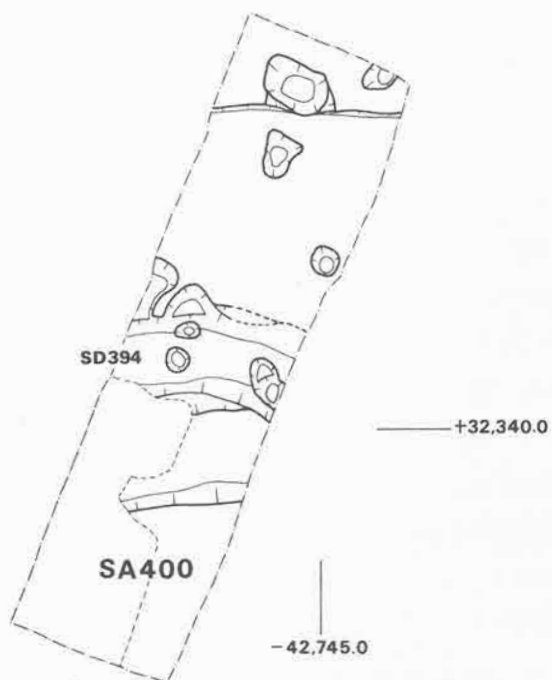
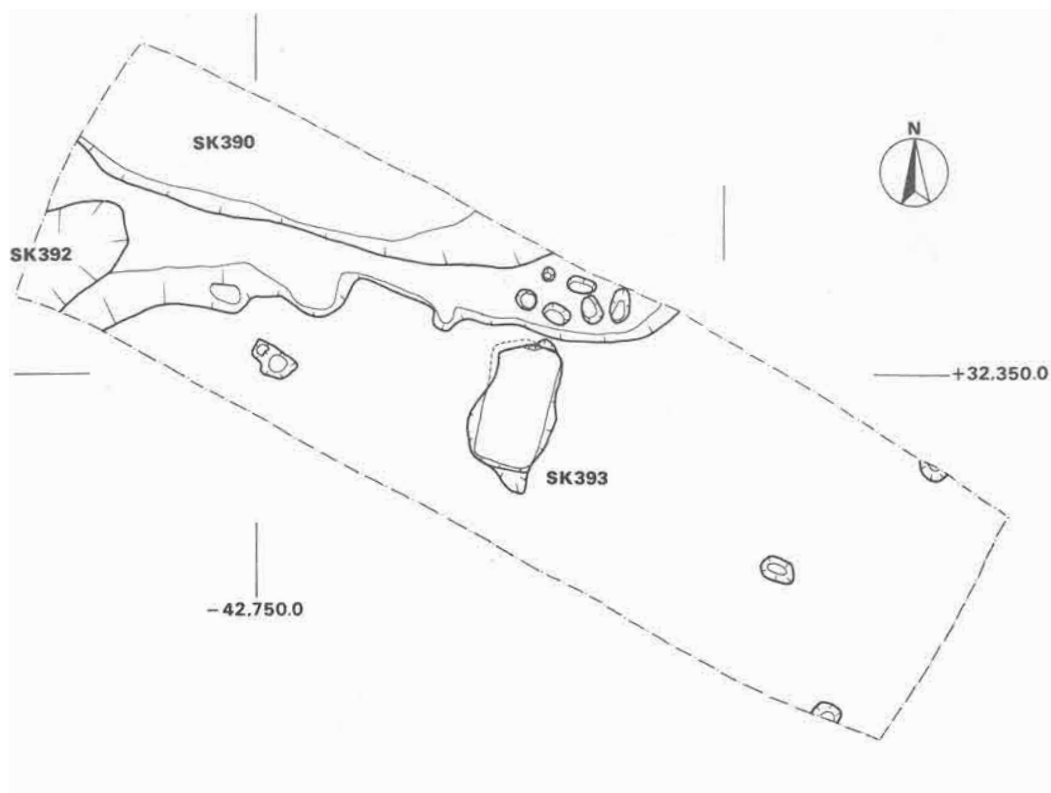
土 壇

SK 390 不整形の土壇の一部を確認したのみで規模及び性格等は不明である。掘り方は、一段のフラット面があり、さらに摺鉢状の土壇が掘り込まれており、深さは約40cmを測る。また、フラット面の両端部に摺鉢状を呈する土壇SK392が確認された。この土壇は、黒褐色粘質土層を切っており、国分僧寺の遺構と直接の関わりはないと考える。

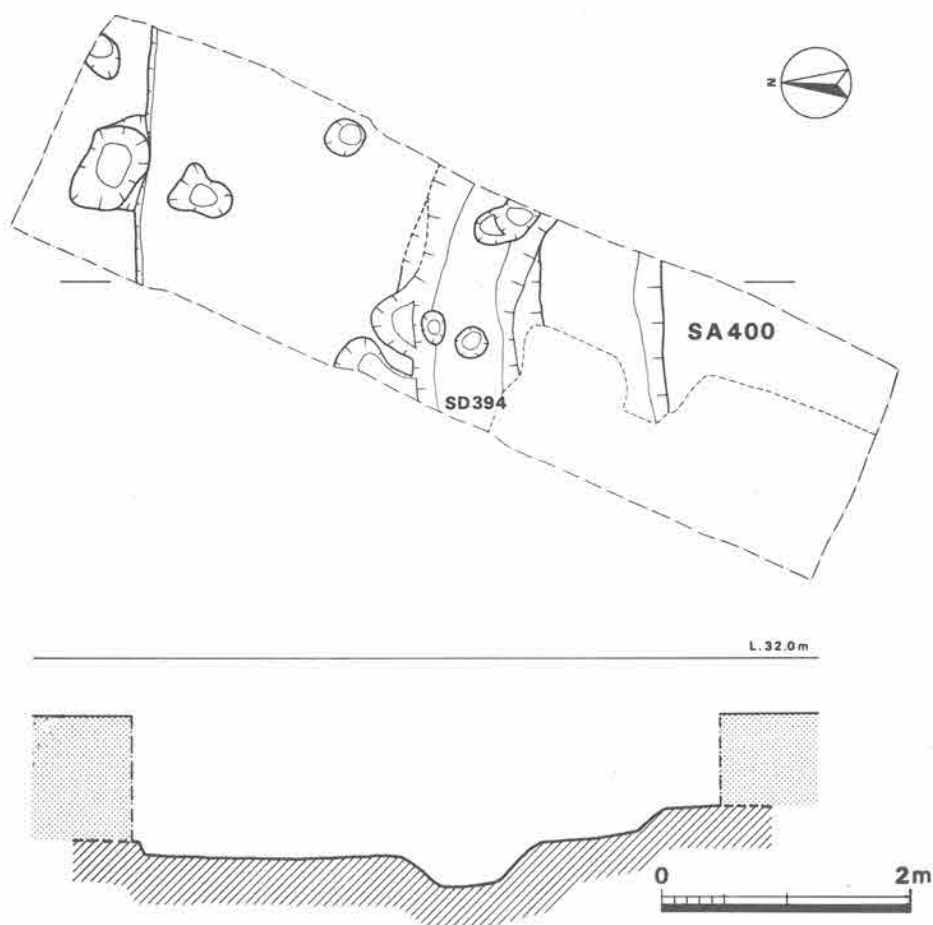
SK 393 底面が隅丸長方形のプランを有する土壇である。長辺約1.3m、短辺約0.8m、深さ約0.8mを測る。底面は、平坦な面を有し約10cmほどの黒褐色土を張り、底面調整を施している。埋土は、暗褐色の粘質土が強く引締ったもので、他の遺構の埋土と様相を異にしていた。遺構の形態から、土壇墓の可能性も考え得る。遺物は、縄文前期に比定される曽畑式土器片が3点発見された。

その他、ピットを検出したが、建物としてのまとまるものはない。また、トレンチ北端において南へ低い段落ちがみられ、築地とほぼ並行に認められる。

3 出 土 遺 物 (第7・8図)

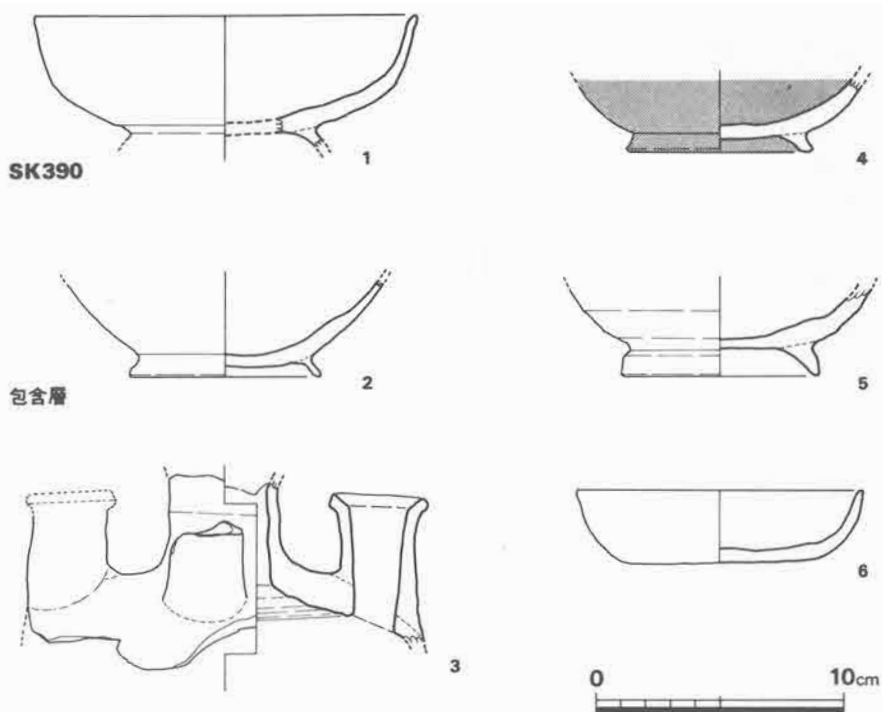


第5図 第22次調査遺構配置図 (1/80)

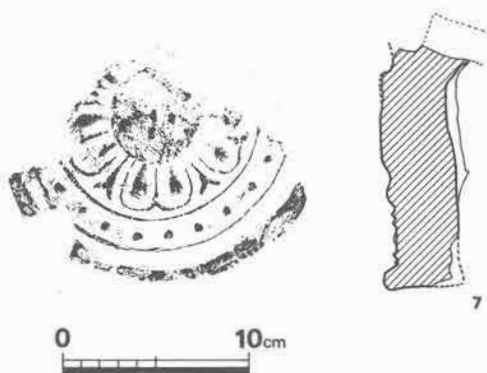


第6図 第22次調査 S A400築地断面図 (1/60)

遺構から出土した遺物で、図示できるものはほとんど見られず小破片が多数を占めている。1は、口径15.5cm、器高約5.5cmの土師器碗である。S K390土壇より出土するが、土壇の時期決定の資料とは考えられず流込みの可能性が強い。2および3は包含層下層から出土したものである。3は、長頸壺の肩に4個の注口をつけた多嘴瓶である。器壁は摩耗が著しく、色調は灰色を呈している。4、5、6は包含層上層から発見したものである。4は黒色土器碗であり内外の器壁を丁寧に篋みがきしている。7は、変形の複弁六弁の瓦当部であり、丸瓦部とともに上部は欠損している。焼成はやや不良の感も見られる。



第7図 第22次調査出土遺物実測図（1/3）



第8図 第22次調査出土遺物実測図（1/4）

IV 小 結

昭和56年度に実施した発掘調査の概要は以上の如くである。

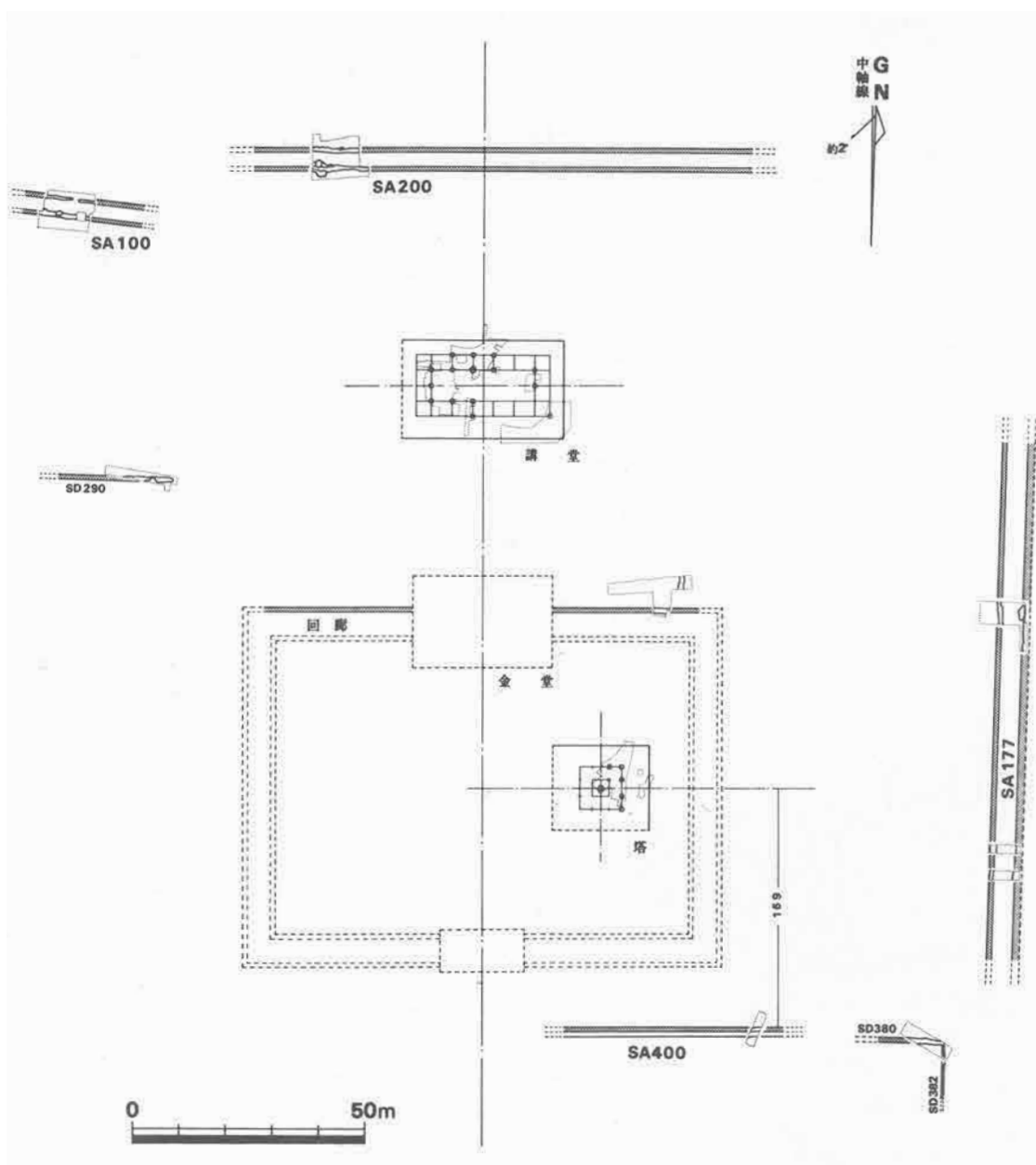
本年度の調査は、住宅建築に伴う事前調査のみで、大きな成果は期待できなかったが、溝や築地の一部を検出した。この築地により、僧寺南限を画する位置が確認されたことは、僧寺寺域の限定に一步前進したようである。

調査の結果、第21次調査において東西の溝状遺構（S D380）、また第22次調査において築地の一部（S A400）が検出された。

S D380溝は、底部が平坦になっており、幅がやや広い感じを受ける。一方S A400築地の雨落溝S D394は、底部は舟形底を呈し、溝の様相がそれぞれ異っている。ここで両遺構を同一と考えて寺域復元を試みると、寺域平面形が基本形からあまりにも懸離れる結果となった。新たに一考を加えS A400を講堂中軸線と直角に復元すると、塔中軸線より、約169尺を測る結果と

なった。現時点では、両遺構を別のものと考え新資料の検出を待つほか方法がないと考える。

筑後国分寺跡は、周知のとおり古くから市街化しており、遺跡の保護など到底叶わぬものと考えていたが、地元住民の理解と協力を得て、主要堂塔をはじめ寺域をも想定できるまでに至った。その後、さらに地元をはじめ、市民への普及、啓蒙の一環として、筑後国分寺跡の史跡指定を、久留米市文化財専門委員会に諮問し、市指定史跡筑後国分寺跡（講堂、塔及び回廊跡）として答申を受け、昭和56年6月1日付をもって公告を行った。また、今後発掘調査の結果を踏まえて、指定地の拡張に努力したいと考える。



第9図 主要遺構配置図 (*数字は実測距離を1尺=0.3mで除し、これに近い完数をとった。)



第10図 市指定史跡「筑後国分寺跡」地域図

版 図



筑後国分寺跡鳥瞰図（久留米市国分町）



第21次調査, S D 280溝 (西から)



第21次調査全景 (東から)



第22次調査
北トレンチ全景
(東から)



S K 393土壇 (南から)



第22次調査（南トレンチ）S A400築地（北から）



S A400築地とS D394溝（西から）

筑後国府跡・国分寺跡

昭和57年3月31日

発行 久留米市教育委員会
久留米市城南町15-3

印刷 布 屋
久留米市城南町18-34

56. 64. 18